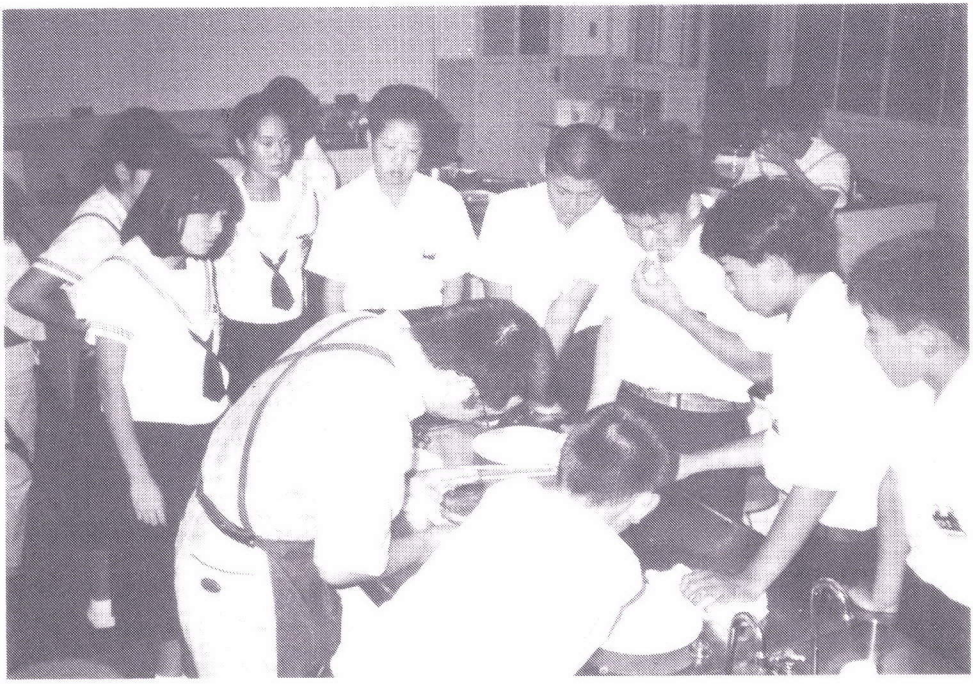
くらしと教育をつなぐ

We

10月号

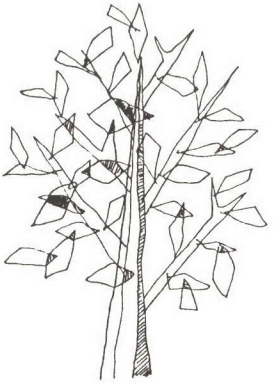
特集　いま、家庭科ホットライン



くらしと教育をつなぐ

We

10月号



《インタビュー》複眼でみる

林　英臣さん　（インタビュアー 間瀬中子）……42

「地球の歴史にもリズムがあった」

連載

● かりん区便り　佐藤通雅……48

● 現代衣生活考　むらき数子……50

● 地域の暮らしと家庭科教育　石川尚子……54

● リレーエッセイ
産む・産めない・産まない（4）　正木美津子……56

● ヤング・イン・ワンダーランド
兄弟・家族　酒井和子……58

● からだに やさしく しなやかに
河村ふみ・加藤由美子…60

◆読者の広場……62

編集後記……68

表紙デザイン／加藤由美子　目次／アトリエ・ネット　題字・カット／小林敏也,土田尚美,片岡誠

くらしと教育をつなぐ
We
1992.10　　自立した女と男を

〈インタビュー〉
シリーズ　男を尋ねる
杼村　正雄さん　（聞き手 吉田明弘・南野忠晴）
「先生にやれるんやったら俺にもできるんとちゃうか」…4

特集　いま、家庭科ホットライン
新学習指導要領の実施目前　石川尚子……10
男女共学必修の実現へ（高校編）　入江一恵……12
男女共学必修の実現へ（中学校編）　礒部幸江……15
家庭科教員をめざす男たち　入江一恵……17
こんな調理実習をやってみたい　熊田　亘……20
家庭科――もう１つの視点　蔵本佳子……22
★ 家庭科情報　芦谷　薫……24
◆ 論争しよう
「男から男へ」を読んで　足立広明……25
やっぱり、「縛りあって生きる」にこだわる　篠原睦治……30

女と男の家庭科新時代
■ オホーツクの潮風荒く …番外編 その4
―飯付き、風呂付き、パソコン命―　江口凡太郎……34
■ 家庭科―遊ゆう・惑わく
―暮らしと環境問題をつなぐ―　坂本智子……36
● 私の本棚から　有坂節子・中村泰子……41

シリーズ

男を尋ねる ④

杼村正雄さん

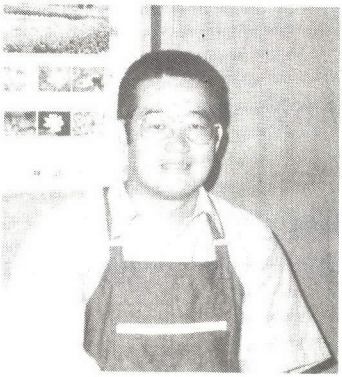
先生にやれるんやったら俺にもできるんとちゃうか

家庭科の教員になりたいという男性が増えつつある。これから教員になろうとしている人、すでに教員になっている人の中にも、家庭科の教員免許を取ろうとする人が現われている。

モノづくりを中心においた家庭科を7年もやっているという杼村さんを、新前男性家庭科教員二人が訪ねた。

聞き手
吉田明弘
南野忠晴

■とちむら・まさお
一九四九年生まれ。'74年に大阪市立住吉中学校の技術の教員となる。'85年から、家庭科も担当。現在は「一年生の家庭科を週三回もっている。「男女平等な社会づくりに貢献した」として、'92年度の日本有職婦人クラブ全国連合会のベスト・メンにも選ばれた。



杼村さんの勤務する大阪市立住吉中学校では、技術・家庭科の男女共学をはじめて、もう二十年にもなるという。教科書も手作りで、長い間の積み重ねが伝わってくるような内容である。

「試験があるからでなしに、やることが楽しいから勉強する、自分のためになるから勉強する、そういう授業を追求したい」と語る杼村さんのこの日の授業は、牛乳からカッテージチーズを作り、それを使ってのチーズケーキ作りだった。十五人の子どもたちが、調理室にうれしそうに入ってきた。

「昔、ラクダの胃袋を利用して水筒にし、牛乳を入れて持ち歩いていたそうです。ところが、さあ飲もうとしたとき、牛乳が固まっていた。どうしてでしょう？」

牛乳が酸によって固まること、そしてそれがチーズであること、チーズの発見に目を向けさせることから授業がはじまる。

「胃の中にはどんな液がある？」「そう、胃酸やろ。だからラクダの胃酸が牛乳をチーズにしたんやな」「酸のあるもの、酸っぱいものにはどんなものがあるだろう？」「レモンなどがあるなあ。今日は酢を使って、牛乳を固めて、チーズを作ろう」

杼村さんの問いかけに、反応がどんどん返ってくる。男の子の積極的な発言が面白い。「それでは牛乳を温めて、風呂よりも少しぬるい温度になったら、酢を入れてください」「固まったものをふきんでこしてよくしぼるんやで」「それがチーズやな。ちょっと食べてみてみ」

味になれないせいか、ウェーッ！まずい、と子どもたちは声をあげている。そんな声がひろがって、にぎやかな雰囲気に教室はつつまれた。

さていよいよチーズケーキ作りである。材料をまぜ、オーブンにかける手ぎわのいい子、じっと見ている子、おしゃべりの多い子、それぞれの個性が見えて面白い。ただ、おいしく作ろうという思いは、誰もに共通のようだった。

焼きあがるまでの時間を利用して、クレープを焼く。

「フライパンの上で、クレープのまわりが、チリチリチリとなってきたら、ひっくりかえすんやで」

子どもたちはチリチリチリとふんわり焼けるクレープに得意になっていた。とくにうまくやっていたのは本田さん。わけてくれてありがとう。おいしかったよ。

実習をとおして、さりげなく

杼村　あれ（チーズケーキ）にはバニラエッセンスとかね、におい消しのためにいれるんやけど、そういうのは不必要やということで余分なものは入れないという実習をね、ずっとやっている。そういうふうにしながら実習をすべて終えて、合成着色料とか保存料の問題を整理したときに、いままでずっとしてきた実習を振り返ってごらん、豆腐作る時でも余分なものは一切使わなかっただろうっていう、そんな、できるだけ系統立てたものを実習の中に入れたい。

――　僕らはつい、添加物の問題から入ってしまうのですが。

杼村　一番最初に、家庭科をやったときに、添加物のことは教科書にもありましてね、もうすでに合成着色料の問題点が出ていたけれど、その時に実習でカレーライスが本にあって、横につける福神漬が、真っ赤な色のやつが、何の疑問もなしに教科書の写真に載っている。そいで、着色料の授業の時にだけ、あかんあかんいうてる、そんなもんは地についたものやない。

ソーセージを作っていても、熱を加えたら肉がネズミ色になるのが普通や、でも、売っているのはピンク色や、それはどうしてや？そういう、実際に実習で作ってきたものと売っているものとを比較して、どこが違うのかということを気づかせながら、食の安全性みたいなことをわからしたいなと思うてるんです。

安全な食べ物いうたら、農業との関係もあるし、環境問題も出てくるし、自分の命を守るということは、他の小さな生き物の命を守ることやし、そのことが人権の問題になる。そういういろんな意味で素材をいくらでも広げられる。歴史的な過程をふまえながら、人類の知恵とかね、労働の尊さとかね、そんなん、展開の仕方によっては、ずいぶん、子どもたちに伝えたいことが、家庭科でできる。それもさりげなくね。

――　さりげなく伝えるっていうのが、いいですね。つい僕らは、あるべき姿を押しつけてしまいがちなのですが。実習をやってみての、子どもたちの反応はいかがですか？

杼村　実習でいろんなことをやってますけど、子供が実習しておいしかったな、面白かったなという感覚だけでも残ればええと思うてるんです。あとの事は、自分がそ

の気になったときに本を開けるだろう、そういう時にホンマもんの知識になるんやないかと思うてるんです。面白くて、もういっぺん家でやってみたいという感覚をつかませたい。自分でやろうとした時に、本当の知恵がつくんやないかな。そんな思いがあるんです。

先生にできるんだったら、僕にも…

――　杼村さんは、もともと技術を担当されていたわけですが、家庭科をやろうと思われたのは、どうしてですか？

杼村　義務教育を終了した子どもたちが、男の子と、女の子で、学んできたことが違うと言うのは、おかしいやないか、それは性差別になるやないか、少なくとも人間として自立していけるような中身を、ということで男女共学をはじめたということがあるんですね。

僕が赴任した時には、すでにそれが定着しておって、子供や親には、共学が当たり前になってきたやないか、じゃあ教師にとっては、どうやねん？

僕はその頃、技術を教えていたけど、技術の教員にとっては、理屈では男女共修も当然となっていたけれど、育児とか家事とかそんなんして何になんねん、みたいなね、良妻賢母をつくりたくないという、そんな思いがどっかにあった。

学級編成の関係で、ある年、家庭科の教員数が技術よりも少なくなった。どっちも同数必要だから、持ち時間の関係もあって、家庭科を応援しようかということになって、そいでやりはじめたのがきっかけ。もともと、技術と家庭科は同一教科として考えていこうという下地も教科書の中にありましたしね。そやから、理屈を実践でやってみようというみたいなね。

――　それで、やってみられたら面白かったのですか。

杼村　今までは、被服なんかでも、難しいことに出会ったときに、なんで男の子がこんなことせんならんねんという声があったんですわ、理屈ではわかっていてもね。ところが、たまたまだろうけど、僕が教えたクラスでは、それが一切なかった（笑）。それは、まあ、男の教師が頑張りながら、失敗も含めてね、姿を見せていることが、「先生にやれるんやったら俺にもできるんとちゃうか」とかね。

そんなことがあって、それから、男だからといって弱

音を吐くというのはなくなりましたね。それ以来、続けて家庭科を教えるようになりました。

――　教師の姿勢から、子どもたちが学ぶという感じですね。

杼村　そうですね。理屈でいうよりも、手本として見せとくほうが、男女共学とか男女共生については、きちっと教えられるのではないかな。

自分の欲求が見えてきた

――　家庭科に関心を持たれる前からも、実際の生活の中で、家事などに積極的に関わっていらっしゃいましたか。

杼村　実は子育てに関わらざるを得ないことがあったのです。

　はじめて生まれた子どもが、生後十日で命にかかわる病気にかかった。たとえ治ったとしても、障害が残るだろうといわれ、父親として何ができますか？と聞いたら何もできませんというのです。ただ、母乳を病院まで届けることと、休みの日に子どもを抱いてやることしかできないというのです。祈るしかないというのです。そういう経験があって、子育ての中で、つれあいだけでなくて、自分もできることをせえへんとあかんと思った。

――　そういう経験が、自然と、自分の生活に目を向ける姿勢を生んでいたということになるのでしょうが、それにしても、家庭科をやる上で、男だからという何か気負いのようなものはありませんでしたか。

杼村　男やからというのではなく、人間としてね、自分で食べられたらいい、食べたい時に自分で作って、自分で食べる、それすらできなかったら、人に頼まないとあかん。そうでなしに、食べるというのは、当然男や女でなしに、みんなに必要なことだから、作れて食べれたら最高やなという思いがありました。

　服でも、好みがありますよね。僕なんかは、ポケットのたくさんついている服が好きだから、そういうのを選ぶけれども、好みのがなかったら、最近はできるようになったから、作ろうかということになる。それまでは力量がなかったから、妥協していたんやね。これしかないからそれに合わせようとしていたけれど、作れるという力がついてくると、自分の本来の欲求とかが、かなえられそうな気がしてくる。そのことは、自立という意味に

おいたらね、男であろうと女であろうと、なんかものすごく楽しいことではないか、という感覚が強い。もともと、作るのが好きということもあったけれども。

だから子どもたちにも、自分でできたら楽しいのとちがうか、面白いのとちがうか、自分にとってものすごく視野が広がるのとちがうか、そんなことを感覚として、子どもたちにつかませることができたらいいと思う。

男とか、女とかいう理屈は、後で誰かがつけることと違うかな。

――今お話をうかがっていて思ったんですけど、自分で服を作ったり、自分で食事を作ってみたりすると、自分はこんなのを着たかったのではないか、こんなのを食べたかったのではないか、そういうのが欲求として出てくる。ところが、そういう生活そのものにかかわっていないと、いったい自分がどうしたいのかという欲求すら見えなくなって、それは実に不幸なことではないかという気がしてきました。だから杼村さんが家庭科をやる中で、自分の欲求が見えてきたといわれたけれど、技術・家庭科というモノ作りに近い教科の、そういう意味での可能性みたいなものを、改めて認識しました。

何でもできる男になりたい

杼村　最近ね、子育てをしている専業主婦と、仕事を持っている男が、一週間でもええからね、立場を交代してみたらいいと思っているんです。男っていうのはね、職場にいったら、適当に息がぬけるんですよね。それで八時から五時まで働いてきたと威張れるでしょう。ところが家庭内労働で、同じように仕事をしているのにね、男は、俺は外で働いてきたから、あと、おまえ仕事せえってね。だから家庭にいる主婦は二十四時間ずっと働いていることになる。金銭的な収入はないけれど、主婦も同じように働いている。だから、男も帰ってきたら同じように労働せなあかんのやないかと思うているんです。

そやのに、主婦は時間も気ままにできるし楽や、と思うてる。その発想のところにね、男は外で働いて偉いみたいなね、男尊女卑の根っこのところがあるんとちがうかな、そのあたりのことにメスをいれてみたら面白いことになるんとちがうかな。

だから、何でもできる男になりたい。相手の力を借りなくてもできるけど、お互いの力を出し合って、協力できる社会が、共同社会の理想といえるんとちがうかな。

《特集》いま、家庭科ホットライン

新学習指導要領の実施目前

石川尚子

一、はじめに

八九年三月告示された新学習指導要領の実施が、中学で九三年、高校では九四年と目前に迫っている。

家庭科は中高でどのように変わるのか、現状はどうなっているのか、家庭科関係者はもう一度事態を確認し、家庭科専門以外の方々には現状を知っていただくことがこの時期、特に必要ではないかと考え、家庭科編集室では、「今、家庭科ホットライン」という特集を組んだ。

昭和二二年スタート当時の「家庭科」は、民主主義教育の一方の旗手であったが、高度経済成長期を契機として、中学校の技術・家庭科が女子向き男子向きに別れ、高校家庭科が女子のみ四単位必修になるなど、性別役割意識を公教育の中で認める方向で改訂がなされてきた。

このように戦後の家庭科は、社会の要請・政治の思惑などによって指導要領の改訂ごとに目まぐるしく変化したが、共修運動のねばりと男女平等の世界的高揚のなか、国際婦人年・女子差別撤廃条約などの外圧が引き金になって、ついに男女共修が実現することになったのである。

二、新学習指導要領改正のポイント

（1）中学校「技術・家庭科」

① 現行の一七領域を精選して一一領域とし、「家庭生活」「情報基礎」の二領域を新たに設ける。

② 「家庭生活」「食物」「木材加工」「電気」の四領域は男女必修、その他の領域は選択とする。また、「家庭生活」「木材加工」は、第一学年での履修を標準とする。「被服」は選択領域となり、履修しないこともありうる含みを残すことになった。

③ 時間数は、現行の一・二年七〇時間、三年一〇五時間から、一・二年七〇時間、三年七〇～一〇五時間となり、実質的には減少する。

（2）高等学校「家庭科」

①「家庭一般」「生活技術」「生活一般」の中から一科目四単位を男女すべての生徒が選択履修する（男女共修）。その中の「生活技術」「生活一般」は新設科目である。

②「生活一般」は、家庭科を履修させる条件が整わない

場合、二単位を限度として当分の間「家庭情報処理」「農業基礎」「工業基礎」「水産一般」「情報処理」「体育」などの履修をもって代替することができる。

一言でいえば、中学・高校とも不完全な形での男女共修であり、学校による格差を拡大深化する内容となっている。十年後の改訂で家庭科は潰れるという人すらおり、家庭科の存在そのものが問われる結果になりかねない。

三、家庭科が抱える問題点及び今後の見通し

新教育課程編成に取り組む全国中高の現状は次頁以降詳しく報告されるが、行政や現場ではまだ十分な準備がなされていないというのが偽らざる感想である。今回の改訂で新設された中学「家庭生活」「情報基礎」高校「生活技術」「生活一般」の導入が拙速であったこと、現場の要求に沿ったものではなかったことに一因があろう。

中学校では、技術科との折り合い・時間数減少への対応・「家庭生活」の指導内容と方法・評価・施設設備・教員配置などに悩みが集中しており、特に、免許の取り方も学問的背景も異なる家庭科と技術科が、同じ教科としてひっくくられている点が大きな問題点として残る。

高校では、家庭科がない学校での施設設備や教員配置の難しさ・三科目から選択しなければならないわかりにくさ・男子に対する時間確保など、学校五日制や受験体制とのからみで各学校とも対応に苦慮している。

特に、週の標準時間が減らされようとしている中で、家庭科の時間数が値切られはしないか、従来家庭科と縁がなかった男子校が置くかどうかが問題点となろう。

後述するように現時点では「家庭一般」四単位を設置する学校が多いものの、全く導入の意志のない所、「生活一般」二単位のみでお茶を濁そうとしている所、一単位減の三単位に抑えようとしている所など様々である。

しかし、次のような例もある。最も家庭科設置が危ぶまれる男子私立進学校のひとつ京都のR高では、①家庭科は生活を科学する教科なのだから男子にも当然必要、②今まで学んだことを総合して生活に下ろすのが家庭科、③今の子供達にはものを作り出す体験が必要、を前面に押し出して「家庭一般」四単位を決定したという。

中高の男女共修家庭科が、しっかり軌道に乗るように、そして十年後には大きく根をはっているように、今が基盤づくりのがんばり時なのである。希望をもって、今日の活動を明日の家庭科へつなげていきたいものである。

《特集》いま、家庭科ホットライン

男女共学必修の実現へ
―高校編―

入江一恵

この秋、高校現場では、'94年度から実施のカリキュラム編成の大詰めを迎えている。〝家庭科男女共修は天の声〟〝家庭科4単位必修は至上命令だから〟の声を聞きながら、その時期が到来すれば制度として何とか踏み切れると思っていた家庭科教師は、設備、人の面の見通しの悪さに苛立ちはじめている。加えて学校五日制導入によって、一旦決まっていたカリキュラムの見直しが始まり、家庭科への風当りが強くなった学校もあると聞く。

この流動的な模様眺めの時だからこそ、お互いの情報を交流しあうことによって何らかの隘路を開く活力になればと思い、家庭科編集室ではアンケート調査を企画した。Ｗｅ読者のネットワークによって18都道府県25校の方にお願いしたところ、早速解答をお寄せいただいた。以下、結果をまとめながら問題点を明らかにしたい。

一、共学に向けての準備状況

◎新カリキュラム編成状況と家庭科単位数及び履修科目

各都道府県単位の編成基準が示されたのが三月から六月、多くの学校ではすでにカリキュラム委員会などで検討中だったものの、夏休み前の職員会議で提案されたケースが多かったようである。ほぼ完了6校、現在検討中14校、今始めたばかり4校、見直し中1校という結果だったが、この秋どのように進行していくかが気がかりなところである。

家庭科の単位数及び履修科目については**表1**の結果であったが、周辺の学校の状況報告によると、進学校といわれる学校は、早く決めると損と、他校の様子を眺めながらの決定、また、1単位削減できるとして3単位を迫られ危うく諦めかけた所もあり、1単位でも減らしたいホンネがちらつき、予断を許さない状況にある。しかし、何れの県においても指導主事は4単位を指導している。

また、公立男子校、男子の多い工業高校では専任の家庭科教員もいない中での検討のため、共学の意義も十分

理解されないまま検討に入っており、「生活一般」2単位、それが駄目なら、「生活技術」で抜け道を、の声もある。公立男子校をもつ宮城の例を表2に紹介する。このように「家庭一般」か「生活一般」か「生活技術」か、4単位か2単位か、ゆれ動いているのが現状である。

そんな中で、工業高校の先生から〝なぜ三科目中「家庭一般」なのか〟を質問され資料を渡して説明した（大阪、兵庫）。また、高教組家庭科分科会が工業高校教師の理解を深めるために、学習会を三回にわたって開き、模擬授業などして4単位の必要性を訴え（熊本）、こうした機会を通じて、工業高校の教師が家庭科の教育的内容についていかに情報不足の状態におかれているかを痛感した、との報告があった。

表1　履修科目と単位数

家庭一般		4単位	22校
家庭一般	※	3単位	1校
生活一般		2単位	1校
家庭一般 生活一般		選択4単位	1校

（1992,7　WE編集室調査　回答25校）
※　教務案として提示、検討中

表2　履修科目と単位数（予定）

	全日制 75							全県
	普通 50			職業25				
	男子 10	女子 11	共学 29	農業 13	工業 6	商業 4	水産 2	75
家庭一般	1	11	23	10		3		48
生活技術				1				1
生活一般	6				2	1		9
学科選択			1					1
検討中	3		5	2	4		2	16
単位数 4単位	4	11	23	11	2	4		55
単位数 検討中	6		6	2	4		2	20

（1992,5　宮城県教育庁指導課調査より　数字は学校数）

◎教員配当と施設・設備

現在の教員数は、専任1、非常勤講師というケースが25回答中11校。当然共学に伴って増加時間数と教員増が予想されるが、農業高校等における学科の改編（宮城）、生徒減による学級減等が予想され、未定とする回答もあった。4単位履修するとして専任2、講師1を算定したところ、専任を1におさえるため3単位に――と人の面から単位数への圧迫もある。定数法の枠内で折衝する時、他教科の教員を減じて家庭科教員増ということになり、このことは、現場において具体的に行動を展開していく場合最も頭の痛い問題である。官制研究会や教組によって定数枠外での家庭科教員の配置を要望しているが、明確な解答は得られず厚い壁であった。ところが今回、「家庭科情報」（24ページ）に掲載しているように、今後、家庭科教員増について定数枠外での可能性も見えてきた。当然といえば当然だが、一条の光明といえよう。

施設・設備に関しては、文部省は全く無い学校から年

次計画で着工すると明言しているが、91年から3校ずつ年次的に着工している県もあるが、総じて進行はかなり遅れているようである。また、未整備の男子校、工業高校13校のうち2校と、整備2校を、研究指定校（2年間）として今年度からスタートさせ、未整備校には週一回家庭科教員が出向いているという県もあった（埼玉）。

現在、施設のある学校も、老朽化や狭小から、果たして男子を受入れられる設備かの心配も大きい。こんな中で、家庭科総合実習室の計画が進んでいる所もある（大阪、兵庫）。また、実習室の狭小と指導の徹底を期すところから、すでに定着している班別学習を共学導入後も希望する声が強く（大分・福岡）、要望はしているが見通しは甘くなさそうだとの報告もあった。

◎指導内容の検討

家庭一般のみ12校、三科目とも6校で、官制研、教組、学校独自で検討が進められているようであるが、授業として実際に展開するばあいの教材の精選と開発については今、最も力を入れているとの回答が多くよせられた。

二、学校五日制導入問題

特に検討していない、未定、8校。検討中、5校。とりあえず七校時必修クラブを使って土曜日を補う、4校。農業関係の管理面検討中、職員の勤務体制は夏休み前に提示、1校などで、現場での対応はこれからの感が強い。

三、まとめと今後の課題

以上、各地の共学への準備状況を中心にまとめてきたが、94年の歴史を持つ女子校に男子が入学（山形）、有名男子私学（京都）の国語のT先生が家庭科の必要性を四本柱をたてて訴え、4単位導入を決定し実施に向けて家庭科教員を募集中と聞く。世の中、音をたてて変わっていることを実感する。しかし、現実には頑迷な競争社会が私達の周りに立ちはだかっている。消極的な私学男子進学校、それを意識する公立進学校、全面共学必修の私達の願いの内実がどうなるかの危惧と共に、学校間格差、輪切りが助長されるのではとの心配も出てくる。

今こそ私達は、女子必修家庭科が何であったかに思いを至し、男女共学必修の理念を確認することによって地域で校内で話し合うことに力を注ぎたい。保護者、生徒への働きかけも必要であろう。あと一年余、飛びかう情報に惑わされて安易に妥協することなく、自分の目耳で確認することにより活路を見出すことが肝要であろう。

〈特集〉いま、家庭科ホットライン

男女共学必修の実現へ
―中学校編―

礒部幸江

中学校では、新学習指導要領の告示に伴い、すでに一・二年生は共学が実施されており、来年度は、三学年全面実施となる。そこで、来年度の実施計画とその問題点について、読者の中学校教員の方を中心にアンケートをお願いした。公・私立あわせて十九名より回答をいただき、それらの中から、来年度からの全学年家庭科共学実施のための問題点を次のようにまとめた。

一、全学年共学を

アンケートでは、**表1**のように全学年共学が多い。私が教員になりたての二十年前は、自主編成に取り組んでいる数少ない学校だけが共学で、他は、男子向き、女子向きと内容もクラスも分かれており、性別役割分担を地でいく教科であった。それから十年後に、相互乗り入れという形で内容領域の一部が共通履修になったが、それは必ずしも男女共学とは限らなかった。今やっと男女がすべて同じ内容を学ぶ制度となったが、問題がないわけではない。新指導要領では、一・二年生は「家庭生活」「食物」「木材加工」「電気」の四領域で、「すべての生徒に履修させるものとすること」となったが、三年生はその他の領域から三つ以上選択することになったので、男女同じ内容を学習せず、別学になる可能性がある。

今回の改訂の大きな柱が「男女同一の取扱いである」ことを学校全体で認識し、積極的に共学をすすめるよう声をあげることが、今、最も重要なポイントであろう。

二、家庭科教員配置と週時間数の確保

表2にみられるように三年生の週時間数に問題がある。改訂前は週三時間であったのが二〜三時間と幅を持たせたため、週二時間になる学校もある。学校や生徒の実態を考えて各教科の指導計画を立てるのだが、実情は、教員の教科別構成によって決まってしまうことが多い。アンケートの回答からも、各教育委員会では家庭科教員の採用を控えて講師にきりかえようとする傾向にあること

アンケート結果より（公立１７校について）

［表１］

1993年度実施計画　学習形態	
１～３年　共学	１３校
１、２年　共学　３年のみ一部別学	２校
１、２年　共学　３年のみ別学	２校

［表２］

1993年度実施計画 週時間数と選択			学習指導要領における技術家庭科の時間数
１年	２時間	１７校	２時間
２年	２時間	１７校	２時間
	選択あり	２校	あり
３年	３時間	１５校	２～３時間
	２．５時間	１校	
	２時間	１校	
	選抜あり	５校	あり

がうかがえた。また学校によっては家庭科教員ゼロのところもあり、一名の家庭科教員では全時間持ちきれず免許外の教員に担当してもらったり、反対に小規模校では家庭科の他にも二～三教科持たされることがあるなど、教員配置の問題が多く指摘された。

どの学校にも家庭科教員がおり、三年生では週三時間、確保できるよう行政にも働きかけていく必要があろう。

表２の選択というのは、「生徒の特性等を十分考慮して」（新学習指導要領）音楽、美術、保健体育、技術・家庭、外国語のなかから履修させるもので、改訂前の週一時間三年のみの選択から二・三年生へと拡大された。そのことで、生徒全員で学ぶ技術・家庭の時間数が減ることや選択する生徒が一部に限られる等の問題が出ている。

三、家庭科と技術科

中学校技術・家庭は家庭科と技術科の教員がいて、それぞれが話し合い協力しながら授業を進めているが、本来目標も内容もちがう教科（家庭科と技術科）が一つの科目とされているため、週時間数を折半している学校が多い。それぞれが一年通して持つと週一時間の授業になり、生徒には印象が薄くなり、かといって前期・後期に分けると、半年間のみのつき合いになってしまい、悩みも多い。家庭科一名、技術科二名というような学校では、三年生では、「家庭領域」をとらないということもありうる。この問題は、文部省が家庭科と技術科を一つの教科にしながら、教員免許が家庭と技術に分かれているという教員免許制度そのものの持つ矛盾でもある。共学が実施された今、家庭科の内容を充実させていくためにも、別々の教科として時間数をきちんと確保できるよう要望

を出していく必要があるのではないだろうか。

四、新領域「家庭生活」の課題

従来の食物、被服、住居、保育の他に「家庭生活」が新しい領域として加わり、「第一学年で履修させることを標準とすること」と学年指定までしてある。その内容は、衣食住、家族などにわたっており、教科書を例にとれば「簡単な材料で整える家族の昼食」（加工食品の利用）、「通学用の衣類のしみ抜き」「ほころび直し」「便利な万年カレンダー」のように、物作りを中心とした寄せ集めである。

この領域については、アンケートの回答にも、これらの例にとらわれず、自立した生活を考え実践できる内容をめざしていきたい、そのために、より判断力や理解力の高まる三年生でやりたいとか、一年生でもやれる教材や内容を研究しているという意見が複数あった。今後も各地の研究や実践を本誌で取り上げ、情報や意見を交換しあっていきたいと思う。

その他にも、各学校で、着々とパソコン教室が整備されていることや、私立校との情報交換の必要性など、多くの問題点が出されたが、今後の課題としたい。

《特集》いま、家庭科ホットライン

家庭科教員をめざす男たち

入江一恵

「家庭科教員をめざす男の会（仮称）」にとりあえず集まって、考えてみませんか！の呼びかけで、去る七月十九日、大阪梅田の郵政会館に十九（男十五、女四）名が集まり、お互いの思いや経験の交流、どうすれば家庭科教員免許がとれるかなどのノウハウまで、熱い意見交換が行われた。

呼びかけ人の南野忠晴さん（大阪府立渋谷高校）、寺本勉さん（同園芸高校）は共に英語の教師。南野さんは四年前、寺本さんは今年の二月に日本女子大の通信教育で家庭科教員免許を取得した人。南野さんは過去に一年間家庭科を担当した経験もあり、寺本さんも近々そのチャンスが到来しそうだという。

家庭科の男女共修を目前にして、この教科のもつ豊かな広がりと可能性にエールを送る男性も増えているなかで、一歩踏み込んで、男女共修は男女共教が本来の姿ではないかと、自らその当事者になろうとする気概が感じられた。

先ず寺本さんから、会の盛況に喜びをかくしきれない表情で趣旨説明があった。「家庭科の魅力にひかれ、〝自分も教えてみたい〟〟教える方にも男女共教があっていいのではないか〟――そんな気持で家庭科教員をめざす男たちが少しずつ増えてきている。大学で家庭科を専攻し、教員採用試験にチャレンジする人、日本女子大などの通信教育で家庭科の教員免許取得をめざす人、やってみたいけどどうしたらいいのか迷っている人など、一度集まってどういう点が問題なのか話し合ってみようと企画した。今回は僕たちのあこがれの的である山内拓司さん（京都府立宮津高校家庭科教師）も招いて経験談を聞くことになっている。あせらず気長くこの会を続けたいと思う」

次に自己紹介。山内さんや、本誌でもおなじみの江口凡太郎さんと共に「家庭科を考える男子の会」をつくっている上田篤史さん（奈良教育大学生）、中さん（京都教育大学生、一週間後に大阪府教委採用試験に挑戦予定）やっと念願かない、四月から伊丹市立伊丹南中学校の常勤講師として技術と家庭を担当している吉田明弘さん、また、男女平等教育を校内で論議するなかで家庭科担当八年のキャリアを持つ大阪市立住吉中学校の杼村正雄さん、現職の府立高校の社会科や国語科教師で免許取得をめざし、日本女子大の聴講生になっている人や、なろうかと入口に立っている人など、その思いと段階はさまざまで、多彩な、顔ぶれであった。

全国で高校に正式採用されている男性教師は三人とか、そのうちの一人、四年目を迎えた山内さんから経験談が話された。小学校の先生になりたくて教育大を受験したものの、家庭科を選んだのは実は偏差値からと、その動機を語る時は苦笑。しかし、女性社会に男性が入ったことで見られる立場となり、男、女について考え、自分の生き方、生活のありようを問うことになる。一つ一つの素材が新鮮に映り、すっかり家庭科にのめり込む結果となる。卒論に教育大系の家庭科教師をめざす男性のネットワークづくりを考え、そこで江口さん等と知り合い、

全国に散らばる点が線となって「家庭科を考える男子の会」が誕生したとのこと。

毎年四月、教室に入ると生徒はエッ―と奇妙な発声で迎えてくれる、同僚教師の見る目。そんななかで、初回は自分がなぜ家庭科教師になったかPR、そして男らしさ、女らしさから自分らしさを探る授業――ここでは生徒全員に発言を求める。高齢化社会、住生活、被服、保育、食物、それぞれの実践が披露されたが、家庭科は衣・食・住と領域ごとに輪切りされ過ぎているのではないか、「自立へ」という基本ベースで扱いたいとの意見もチョッピリ。

遠慮がちな話しぶりは、教師一年目の山内さんをWe兵庫の会で招いた時と変わらないが、その内容とおさえる視点の中にキラリとしたものがあり三年間の実践の重みと成長ぶりが伺え、脱帽した。

やっと一学期を終えたばかりの吉田さんも、当初は職員に変なヤツと見られたが、最近は生徒と楽しそうにやっている姿を見て家庭科に興味を持つ人も出て、苦労も多いが楽しいという。

しかし一週間後には採用試験が迫っている。正式採用への道はけわしい。現職教員から家庭科の免許をとる門戸としての日本女子大の通信教育課程では、今年度の家庭科聴講生が四一名と急増し、その対応に苦慮しているようである。折角、志をたてても狭き門になりそう。このあたりへの要望も必要なのではないか。この会への今後の期待は大きい。この会を必要としない社会の到来することを一方で願いながら。

〈特集〉いま、家庭科ホットライン

こんな調理実習をやってみたい

熊田　宣

二年ぶりに、日本女子大の夏期スクーリングに参加した。科目名は「調理（選択）・（西洋）」、つまり西洋料理の調理実習である。実習で汗まみれになりながら「調理実習でこんなことができたら」とアレコレ考えた。

もとより、暑さでフニャフニャになった頭（なぜ調理室にクーラーがないのだ!?）が思いついたこと。現実を知らぬ家庭科教員の卵が、愚にもつかぬことを言っていると受けとめてくださって結構です。

昔の料理を作る

調理実習のテキスト（長田真澄『西洋料理　理論と実習』新評論）が面白かった。それも授業ではほとんど触れられなかった西洋料理の歴史のところがとりわけ。

「メディチ家のカトリーヌ（サン＝バルテルミの虐殺の首謀者！）がフランス王太子アンリと結婚した時イタリアから同伴したコックによってフランス料理が改善された」「ベシャメル＝ソースの名前はルイ一四世の料理長にちなむ」「スペインでは、中世の異端審問を避ける（イスラム教徒でないことを示す）ために豚肉料理が普及した」なんてくだりを読むと「世界史」を飯のタネにしている僕はゾクゾクしてきてしまう。

そこで考えた。ルイ一四世の時代の貴族の晩餐と、庶民の食卓をそれぞれ再現するなんて実習はどうだろうか。「食の歴史を探る」とでもタイトルをつけて。時々そういうイベントがあるじゃないですか。貴族か庶民か、どっちを作って食べるかは、班ごとのクジにする（教員はもちろん貴族）。クジを引く時、盛り上がりそうだ。

料理のおおもとから作る

鳥料理では、各班ごとに鶏一羽をさばいた。といっても、既に羽根をむしって「半完成品」になっているので、「われわれ人間は、他の生き物を殺して食べることで生

きているんだぞー」というリアリティがいまいち乏しい。

六〜七年前、農業高校の社会科教員が、社会科と農業科の実習をタイアップさせ、生きている鶏をしめて、さばいて、食べるところまでやらせるという実践報告をするのを聞いたことがある。指導助言者だった文部省のヒトは「こういうのは社会科ではない」と言わんばかりだったけれど、家庭科でなら文句も言えまい。

先日学校で、遠足の飯盒炊爨のメニューを考えてもらっていたら「先生、カップヌードルやボンカレーじゃ駄目？」と聞く生徒が何人もいて恐れ入ったのだけど、なんかこう、生徒ともども、もっとナマナマしく「食の根源に迫る！」ような実習をしてみたいものだ。

全部ひとりで作る

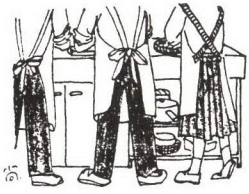
今回しみじみ感じたのだが、班での作業というのはやりにくい。まあ、分担や段取りを確認しないからなのだが、しょっちゅう「船頭多くして」になってしまった。

そこで、すべて個人プレーの調理実習というのをやってみたい。みんな自分の分を一人で作るのである。

もちろん、授業での実習には「班で協力する」とか「お互いを認め合う」とかいった「教育目標」がつきまとうから班ごとでいいんだろうけれど、「一人ひとりが生活レベルで自立する」ということを中心に置くんだったら、この方が目的にかなうような気がしませんか。

そもそも、何人もの人間で一緒に料理を作るなんてことは普通ない。合宿や軍隊じゃあるまいし不自然である。

もっと言えば、個別に調理するだけじゃなくて、予算だけ決めておいて、献立づくりから材料の買い出し、調理・盛りつけに至るまでみ〜んな一人でやる。料理で大変なのが調理そのものよりその前後だということは、経験者なら誰でも知っているでしょう。ついでに、料理コンテストもしてしまうのだ。生徒の個性や才能が赤裸々に出て、面白いと思うんだけどなあ。（埼玉・志木高校）



〈特集〉いま、家庭科ホットライン

家庭科―もう一つの視点

蔵本佳子

来年度より勤務校で男女共修が実施できることになり、専任の増員、内容の充実など、課題が山積みです。でも今の私には、学校そのものへの危機感が強く、そこからどう脱していくかが一番の関心事となっています。

学校がつぶれかけている、正攻法では、この先、息切れしそうな予感がずっとあって、そのことを深めたいということで、静岡の梶原さんと共に昨年より「学校　絶望？　希望？」の講座や「Ｗｅ」七月号を企画してきました。この予感は、「共修になるとますますひどくなるのでは。男女共に学ぶことでどよめきや緊張感が作れればよいけれど、その前に教師自身がひどく疲れてしまうのでは」と思われる方には共通してあるのではないかと思っています。

生徒と毎日接していて見ていると、彼らは体を動かし、友人としゃべって、二時間をワクワク過ごしたいだけ、心静かにいたいだけに思えます。そんな生徒を目の前にすると、生活や生きることの諸問題を論理的に教育的に意識させることは、まず無理だということを感じ始めています。

六月号の「はつげん」でも書いたように、私は、なにかテーマをひっさげて教室に向かう気負いをすこしづつ減らすようになってきました。それではいったいどうしたらいいのか？自分の中に凝縮したテーマを「雰囲気」で伝えていく…理論でない方法で伝えてみる……。

このようなことを考えたきっかけは、この一年、佐々木賢さんのお話しを考えてきたことが影響しています。佐々木さんの接して来た定時制の高校生が今の学校の生徒と多く共通点をもち、その中で「教育」を疑い、「近代」や「消費社会」との関わりまで煮つめてこられたお話がとてもよくわかるし、説得力をもっていました。

強力な消費社会にどっぷりつかった生徒には、「○○しないようにしましょう」式の「近代」の矛盾のみを指

摘した授業がとても空しく、あまり生き方の力になっていく手ごたえを感じないのもうなづけます。しかも理論というか、言葉の抽象性を理解することになれた子供ならいざしらず、「言葉の教育」ということにウンザリしている子供たちは、それだけで無意識の拒否をします。教育にあきあきし、サービスに慣れ過ぎ、手応えを失った子供たちにとって家庭科が何を為しうるのか？

どんなに制度や設備を整えても、人間らしい心の通いあう関係なしに家庭科はできないし、かみあっていかなければ説得力をもたないでしょう。そのために「教育」のありかたや教師の権威性は大きな障害になりここを疑うことから出発しようとする佐々木さんの考えは、身動きの取れなくなっていた私には、むしろ救いになりました。

さらに佐々木さんは「近代」のテーマとして「幾何学、規律、時間割、制服、清潔、美徳、健康」等をあげられ、それが同時に「教育」のテーマでもあったと言います。確かに「教育」は知識層を広げ、「近代」社会の推進力となってきたのでしょうけど…。再び私は「近代や個の確立などがいまの人々にとって必要な事なのだろうか。必要なのは、人と人のつながりなのではないか」という佐々木さんの手紙を思い浮かべます。

ですから今のところ私は、彼等が人間として欲している素朴な欲求を、手作業や、なにげないやりとりなどから拾い出し、それを「近代」や「消費社会」を否定する空間や瞬間として位置づけたいと思っています。その角度で家庭科の内容を見ると、例えば「健康」であることを至上命令とした食教育、縫う行為そのものよりも教育的意義を重視する被服制作など、多くの矛盾が見えてくるのではないでしょうか。

理論よりも感覚としての記憶のほうが生きる力に結びつくこともあるような気が、この頃はしているのです。

この特集号では、家庭科男女共修にむけて様々な問題が出されましたが、今後の動きも目を話せません。

家庭科編集室では、授業実践と共に誌上での情報交換を企画しております。情報及びご意見をぜひお寄せ下さい。（送り先　We編集室）

★家庭科情報

各県では、94年度から実施の男女共修家庭科に対応した条件整備が始められています。そのうち施設・設備に関して公立高校においては、おおむね年次計画を立ててすすめられているようですが、家庭科の増員については、現行の教職員定数法の中では他教科の教員減が条件になること、加えて生徒数急減期を迎えての学級数減や五日制の導入などが予測される時期と重なることもあり、具体化がなかなかすすみにくい状況のようです。

この家庭科教員の増員に関連した記事が、『内外教育』92年8月4日号、8月28日号に出ていました。それによると、

一、文部省の「教職員定数の在り方に関する調査研究協力者会議」（座長・蓮見音彦学芸大学長）は、7月28日「今後の教職員配置の在り方について（中間まとめ）」を発表した。その報告中の、高等学校の部の教職員配置の在り方の2の項に『なお、家庭科が男女必修になることに伴う教育指導に適切に対応できるよう配慮する必要がある』の文言が入れられている。

二、文部省は報告を受けて「この内容を網羅する計画をたて、可能なものは来年度予算の概算要求に反映させて平成五年度からスタートさせたい」（教育助成局財務課）と意欲的に取り組む方針を明らかにした。

三、第六次公立義務教育諸学校教職員配置改善計画を文部省は8月21日に発表。高等学校の第五次教職員配置改善計画は自治省と協議し、今年11月を目途に策定する。

三の「自治省と協議」というのは、高等学校の教職員定数改善のための予算は、文部省からの国庫負担金ではなく、地方自治体への交付金（地方自治体交付税）の中に含まれるため、自治省との協議のうえ第五次改善計画が作成されるということです。

この「中間まとめ」の持つ意味は現行の教職員定数法が近々改善され（第五次改善計画）、その中に家庭科の男女必修化に関連して人員配置に関する何等かの措置が講じられる可能性が出てきたということです。

――家庭科編集室

「男から男へ」を読んで

足立広明

「こんな本があるよ」某市役所に勤める妻から『We』五月号「男から男へ」を見せてもらいました。へー、こんな雑誌もあるのか、といろいろ考えさせられました。とくに日本に十七万も父子家庭があること、重川さんの発題ではじめて知りました。

また、津田さんには同じ変則共働き、保育所送迎組として、諸橋さんには研究する者として、いろいろ共感するものを感じました。このような雑誌には是非育っていってもらいたいものだと思っています。

ただ、その前に議論を活性化させるために、「論争」というのをふっかけてみたくなるのが研究者の性分です。発題者の方々の他、いろいろな方面からの応答が呼び起こせれば、と考えて、あえて厳しい文言を以下に連ねました。

私は現在大学の非常勤をしながら、日本学術振興会というところから特別研究員として給付を受けている「発展途上」の研究者です。子供は二人いて、上が六歳、下が三歳の兄妹です。妻の職場が遠いので、私が毎日の送迎やご飯作り、掃除などをします。このような立場、あるいはこのような立場に忸怩たるものを覚える立場からすると、まず重川さんの文には次のような疑問が生じました。

ひとつ思ったのは、この人は小さい子供を育てていないということです。もちろん、私も大きな事がいえるほどのことはしていませんし、父子家庭で三六五日連続というのは想像もできません。しかし、それでもあえて言いたいのは本当に「地獄、地獄」というようなことなのか、ということなのです。上が生まれてこの六年、最初のころと比べると本当に楽になりました。この先下が小学校にでも上がればもう天国、というのは幻想かもしれませんが重川さんの場合、離婚の時点で下の子でも現在の私の上の子よりずっと大きく、一体何がそう困るのか、私などには今一つわかりにくいところがあるのです。

もちろん、大きくなればなったで登校拒否などのより精神的にこたえる事態も生じて、一概に子供の大小であれこれ言うことはできませんが、少なくとも便器がどうしたとか野菜がどうしたとかいう段階ではないと思います。重川さんは子供のお尻をふいたり、うんこのおしめを洗ったりしたことあるのでしょうか。それに、「待ったなし」と言っても、中学や高校のお子さんが、フライパンで何か炒めているときに「しっこ」というわけでもないでしょう。大体、

お父さんが必死で食事を作る間、お子さんたちは何をしてるのですか。三歳の子供でもその年齢に応じた「家事」ができるのであって、私ならその年齢になれば多くをゆだねてしまうつもりです。共働き家庭の友人なんか、ずっと妹にご飯を食べさせていたそうだし、みんなで相談して毎日をのりきっていこうというところがあれば、「地獄、地獄」というなかに楽しさも見いだせるのではないですか。それに、結局一番小さい子供は「テキ」呼ばわりされる元の妻のほうが引き取っているというところ。もし、逆に女性が大きな子供だけ引き取って、それでなおかつ相手の母親などに援助もしてもらって、それで「地獄、地獄」の手記を出せばどうなると思いますか。そんな女性の家には脅迫状がくるかもしれませんし、まずそんな「バカな」ことは「母親としてとても」書けないし、考えもつかないことだと思いませんか。女性だってだれもが家事、育児に才能があるわけでなし、それでも母子家庭のほうは何も言えないということも考える必要もあるでしょう。「テキ」のほうの人の気持ちも是非聞いてみたい。

ともかく、理念や議論でなくと言いつつ、やっぱり理念、議論が多すぎて、ただ当たり前に家事や育児をやることについて、「能書き」が多すぎる（厳しい言い方ですが）気がします。男の議論、二千年。北斗神拳ですか、て気がする。私はそういう歴史を打ち破るために毎日家事や育児をしているのではありませんし、そんなことは考えてもみなかった。父子家庭の置かれた厳しい状況というのは確かにもっと取り上げられるべきことでしょうし、重川さんの場合、それを実感として体験したわけですが、それでもトラック運転手の人達のような、「強いられた」シングル・ペアレントとはだいぶ状況は異なると思います。

重川さんの言うように、父子家庭の男にかかる再婚圧力というのは、たしかに考えさせる内容をもっていました。父子家庭でなくてもシングルが社会的に位置がないというのはおかしい。しかし、この場合でも、別に好きな人ができたら結婚なり同棲なりしても良いのではありませんか。それでまた相手にいろいろ押し付けて暮らすのなら別ですが、そうでないのなら別にかまわないと思います。むしろ、再婚してなおかつ元の木阿弥でなく、家事育児も分担できるかで試金石となるというような見方だって可能です。そこにまだふっ切れないひっかかりがあるようで、自然なシングルの姿がまだ十分形成されていないのだと感じました。

このことに関連して、確信犯的シングルの人にこちらから球を投げておこうと思いますまず立木さん。あなたふだんどういう仕事をしてどんな生活してるんですか。言ってることがものすごく堅くて決めつけたみたいですね。はじめにシングルといって

も制度としての結婚を否定してるだけで、人間は最後は一人ということがわかる人なら誰でもシングルで、とか腹の太いようなところを見せようとしていて、最後は絶叫というか、シングルの語義が極端に狭くなっていってること、ご自分で読んでわかりませんか。

結婚しない女性、子供を産まない女性への国家の冷淡な態度とか、こういう人が年をとったらどうなるかとか、確かに重大な問題だとは思います。でも、そこから逆に家族というのは全て抑圧装置でしかないとかどうして言い切れるのか、全然問題が別だし、家族というのを、男が会社に行って妻がそれを支えてという一形態だけでしか見てない気がします。子供がいて、仕事も続けている女性の事は考えたことあるんですか。みんなまだ仕事をしていて忙しくしているなかを、とても言い出せる雰囲気でないところを、「子供を迎えに行くので帰りますっ。」その背中に浴びせかけられる冷ややかな視線。「女は楽でいいよな」言ってるオジサンたちはその後も何も気にせず仕事をして、赤ちょうちん、家の事など顧みない。保育所送迎組の目からすると、逆に世の中は男のシングル中心主義だとも言えるのです。結婚したあとも、引き続きシングル時代と同じ価値観、生活スタイルを固持するために専業主婦が必要とされ、それによって次世代の養育（補充）も可能となります。単身赴任の問題なんか、このことを如実に示してますよね。

もちろん、いつまでもシングルでいると「なんだ、女の一人も養えんのか」と排除されるということはあるし、シングルが社会で認知されるための運動はあって当然でしょう。でも、そのルサンチマンがあるのか、シングル以外の問題について、こんなものは、という言い方は賛成できません。子供についても「今の日本に産み落とすこと自体、子供にとっての最大の人権侵害」だそうですが、そうすると、ペルーのインディオとか東南アジアの民衆とかの親はもっと悲惨な状況のなかに子供をせっせと送り込んでいるから、極悪非道の悪魔ですかな。

自立した個人が会いたいときだけ会って、というのも、それはあなたが健康で強いからでしょう。いずれ年をとったらどうするんですか。あなたの子供でなくても、だれかがみないといけないんですが、「抑圧装置」で「人権」を損なわれてきた人に頼るんですか。　諸橋さんの場合でもそうですが、受験とか思春期とか、本当に親がうとましい時はだれしもあって、家族＝抑圧装置としか見えないようにもなります。でも、シングルのままで、いつまでも母と暮らしているというと、「マザコン」というような言葉が浮かんできて、到底、「そうですか、うらやましい、私もそうなりたい」と

いうような自立した姿に見えない。「母親が死なないと僕の独り立ちはできない」人がどうやって自信満々のオジサンに立ち向かえるのですか。それ以前にどうやって学生に「男性学」とか「女性学」とか教えられるのですか。

高学歴の父と溺愛する母。この構図は私にもぴったりあてはまります。喘息の問題などがそれに拍車をかけています。いまだにそこから抜けきれていません。しかし、結婚し、子供が出来、毎日走り回っていると、そんなこと考えていられません。そのような生活が長く続くと、それなりの堆積ができてきて、だんだんと距離もとれるようになってきました。第一、妻は別人格で、こういう親子関係に従う気など毛頭ありませんし、私もそれで当然と思っていますから、いろいろ動ける空間が広がってきたという気もするのです。家族をつくるということも、「抑圧」に対抗する一つの選択肢なのですよ。

こう言うと、おそらく妻との関係とか子供をめぐってのやりとりとかの中に新しい「抑圧」ができると言うのかもしれません。確かにそのとおりですが、そうやってゴチャゴチャと絡み合いながら人間は歴史を作ってきたのではないのですか。

シングルの歴史も決して権力と無縁ではないのです。キリスト教は、極端に独身修道制を称揚し、性をけがれたもの、神への不服従、堕落のシンボルとしてとらえました。教会の監視下において、貞節の契りを神の前で誓約する結婚のみが人間に許されますが、その場合でも腐敗、堕落しないように、さまざまな告白がその後もついてまわりました。その性のヒエラルヒーの頂点に立つ者、それが独身で修行する修道士でした。天皇制とか、アメリカの保守的キリスト教主義は家族主義を前面に押し出していますが、世界の宗教の多くが、独身修行者に「聖なる者」としての権威を授けてきたことも押さえる必要があります。仏教もそうですし。後に複数の妻をもつムハンマドも神の啓示はヒーラ山で一人家族から離れて修行するなかで得たのです。

あなたとそっくりの言説は、東方キリスト教最大の教父とされるヨハネス・クリュソストモスにあらわれます。彼はこう言います。

―妻子や奴隷、家庭の気遣いなどについて言わせてもらおうか。非常に貧しい妻を娶ることや、非常に裕福な妻を娶ることはよくない。前者は夫の資産にたいして有害であり、後者は夫の権威や自立にとって有害だからである。

子供をもつことは悲しむべきことだ。一人も持たないということはさらに悲しむべきことだ。それは、後者の場合、結婚はなんの目的にもいたらなかったということであり、前者の場合、つらい束縛

を経験しなければならないからだ。もし、子供が病気にでもなると、それは決してささいな心配事などではない。不意に死にでもしたら、それこそなぐさめるすべもない悲しみだ。

だから、私はそんなものに煩わされず、自由でいたいのだと称し、聖書や古典の万巻の書を読み、「黄金の口」と呼ばれる雄弁術を磨き、膨大な著作を残しました。下々の者は、彼のレトリックに唖然とし、自らの「罪深い生活」に恥じ入って帰るのでした。しかし、これを引用させてもらったフィップスという人はこう言い切っています。

—これは自己中心の快楽主義を表しているに過ぎない。

本当にそう思います。いまでも大学の男のセンセってコノテのひとがわんさかいますよね。次にあなたの言説。

—それに抑圧装置としての家族というのはぼくはもういやだな、支配・非支配もいやだし、とくに子供がいると、子供をめぐっての夫婦のやりとり、そして子供そのものを所有物としてしまう。あるいは溺愛する、あるいは取られるのがいやだというのも出てくるかもしれませんし、その前に子供より先に死ぬのはいやだし、子供に死なれるのはいやだし。

言葉として人権に配慮するところが古代にはないのは違いと言えば違いですが、本質的にどう違うんですか。

シングルの人への「気楽なやつめ」といったジェラシー剝き出しの文章になってきましたが、私はシングルか既婚かを問わず、朝早くから悠々とネクタイを締めて「わしは仕事をしておる」と傲然とあるくオジサンをみると、そのネクタイを引っ張ってやりたくなるのです。その横でスリッパばきでゴミ出しをする私のほうが、きっと朝は早いに違いないのに。それから、もう一頁読みたいのに、というところでまた今日も本を閉じて保育所に向かう心境。そんなしんどいのがいやだからシングルを選ぶのだともいえるでしょう。

しかし、それでは世の中の歯車が余計速くなる。子供がいても研究ができるよう大学の方が変わるべきで、会社もそうだと思います。

—ご批判、ご叱責お寄せください。

やっぱり、「縛りあって生きる」にこだわる

篠原睦治

本誌6月号に、ぼくの「縛り合って生きる　せめぎあう共生」（本誌創刊号）に対する池田祥子さん、寺島紘子さん、杉山百合子さんの反論が載った。反論を繰り返し読んで、「ここの箇所、読んでくれたのかなあ」「そこはこうやって応えているではないか」などと、苛立ちや不満を持った。といって、ぼくは、沢山喋ったことを編者があんなに短くまとめたものにむきになられたってと弁解するつもりはさらさらない。武田さんは、ぼくの言いたいことを実に適切にまとめて下さったと思っている。その分、過分に反響をいただくことができたのだろうと喜んでいる。

まず、ぼくが、「男と女の問題」を語るときの心掛けについて書いてみる。日常の生活のなかで、ぼくもずいぶん大勢の女たちと出会ってきたし関わってきた。妻、娘三人、「共生・共学」を願ってともどもに創ってきた子供問題研究会等で出会う母親たち、職場の同僚、女子学生、などなどと。そのなかで、「男」として育てられ振る舞ってきたぼくがいろいろに糾されてきた。もちろん、返しもしてきたし、けんかもしてきた。そのなかで「男の横暴」を嗅ぎ付けられることもあったし、自ら気づくこともあった。こうして、今日も、しんどくも楽しい「女たちとのつき合い」が続いている。寺島さんは、ぼくの生き方には「女とのせめぎあい」がないと茶化し気味に断定しているが、ぼくがあそこで「せめぎあう」と言ったとき、「女たちとの諸関係」を外しているつもりはなかったし、むしろその関係に焦点を当てて話していた。ちょっと失礼な読み方ではないかなと思った。

ぼくも、池田さんが言うように、男女差別の歴史的・社会的文脈の中に組み込まれて、そのような男として生かされてきたし生きてしまっていることをよく承知している。そのことは、特に妻との関係でつねづね感じてきた。それ故、糾したり、居直ったり、そしてときに、甘

えたり、感謝したりしてきた。ぼくらの場合、妻もまた、その関係に安住することがあって、「お互いが納得して心地よければ、それでいいではないか」と夫婦で開き直ったりすることもある。こうして、確かに、ぼくの中にもある「男の生き方」を自己点検するさいに、お三人も指摘されるように、歴史的・社会的文脈のなかで自分を客観視することは必要だと思っているが、一方で、日常の女たちとの関係のなかで、いろんな矛盾を抱え込みながら、その分、せめぎあいつつ、その上で、妥協と調和のとりあえずの関係を探ることに関心がある。

したがって、あのインタービュウのなかでも、ぼくの「男としての生き方」を外して、「障害を持った子の母親」の生き方を褒め上げ、あげくのはてに、〈池田さんの言う〉〈インテリ女〉一般を非難した覚えはさらさらない。それどころか、ぼくは、傾向として負わされてきた「主婦」の位置で「わが子と共に生きる」生き方を見いだして、「障害児」と呼ばれるわが子も地域の学校へと願い、そのように行動しだした母親たちに多くを学んできたし、「男たちが奪われてきた生き方」だと気づいたのだった。

池田さんが、ぼくの言い方のどこから「彼が、『有能な』〈インテリ女〉よりも生活まるごと背負いこんで生きる〈おかあちゃん〉に親近感を持つというのも、彼らしいなあと思っています」という感想を持つにいたったのかさっぱりわからない。そもそも、今日、ぼくは、〈おかあちゃん〉という表現に抵抗感を持っている。確かに、かれこれ二十年前、「障害児は特殊教育を受けたほうが良い」と考えていた頃、「わが子も普通学級へ」と語りだし、同様な立場の親たちを励まし、当時のぼくのような考えを持った専門家や教員たちを告発し出した母親たちの生き様に、ハタッと気づかされながら感動をこめて、〈おかあちゃん〉と繰り返した時代がぼくにもある。でも、つきあいつづけるなかで、今では、「○○ちゃんのおかあちゃん」とは言わずに、そのひとの名前で呼ぶのが普通だ。そして、親しくなるにつれて周りの調子に合わせて、ファースト・ネームで語りかけることもある。つまり、そのように生きようとする母親たちをいつまでも賞賛しているわけにはいかず、ぼくも巻き込まれていって、（相手から言うと、ぼくにも巻き込まれていって）、仲間の関係、つまり、せめぎあう関係にも

なってくる場合がぼくの周りにもごろごろある。そして、今日、「教育相談」などではじめて出会う母親たちに対しては「お母さん」ととりあえず呼んでいる。

〈おかあちゃん〉と〈インテリ女〉を二分したのは誰か

ここで、女たちを〈おかあちゃん〉と〈インテリ女〉に二分したのは、ぼくでなくて、池田さん自身だということを自覚してもらわなくてはならない。そうなると、男と女の問題を論じる池田さんの立場が気になってくる。〈インテリ女〉の側に立って防戦しているようにも感じるし、どちらの立場に立っていないようにも思える。とすれば、そのような位置でこの問題を論じてしまう（池田さんの）〈インテリ女〉性だけは気になってくる。もしかすると、このような位置からこの種の問題が声高に語られる傾向がなかったか。それを、ぼくは池田さんの語り口に感じてならないのだ。

誓って言うが、昨今、ぼくは（池田さんの言う）〈インテリ女〉をその「有能」性故に嫌悪を感じたことがない。そもそも、自慢するわけではないが、ぼくだって、〈インテリ男〉なのだろう。ぼくは、ここ二十年間、自分の中の「エリート志向」「上昇志向」に反省的に気づいて、そうでない生き方ってどういう風にすることだろうと考えてきた。その問いを持って、大学教員、専門家、つまり、〈インテリ男〉として生きることは折々に矛盾だし葛藤もする。断っておくが、ぼくはこの生き方をヒロイックに歯をくいしばって選んでいるのではない。矛盾を緊張的に生きることで、いろんな体験、思わぬひとびととの出会いに直面してきたし、そこにリアルな喜怒哀楽があると感謝すらしてきた。

ところで、ぼくの職場にも、（池田さんの言う）〈インテリ女〉がいる。ぼくは、この〈インテリ女〉たちもまた、〈インテリ男〉たちと同様に、自分たちの〈インテリ女〉性に気づきつづけるべきだと思っている。そうでないと、男たちのあいだに、能力に基づく分断と抑圧が起こってきたように、女たちの間でもそうならないとは言えないと、ぼくは、（池田さんの言う）〈おかあちゃん〉たちと出会いながら、警戒的に発言してきた。

大急ぎで加えて言うが、〈インテリ女〉がすべて〈インテリ女〉性をぷんぷんさせて生きているとは思わない。そんな傾向を反省的に意識しながら、（池田さんの言う）〈おかあちゃん〉として生活しているひとたちは、ぼく

の職場の内にも外にも、あのひと、このひとと想起することができる。そして、概して言えば、〈インテリ男〉が執着してきた「エリート志向」や「権力志向」に毒されている〈インテリ女〉はいまだ少ない。だから、お互いの生き方に共感しあってと思いたいが、ぼくには、けっこう仲の良い〈インテリ女〉たちがいる。

「近代」に男用、女用があるのか

こんななかで、ぼくは、思想として語られる近代主義的男女平等論は能力主義を超えていないんじゃないかと問題提起をしてきた。杉山さんは、封建的・前近代的男女差別が今なおあるし、ぼくにその認識が欠けていると批判しているが、ぼくがあのとき話したのは、それを超えていく際に警戒したい近代主義的な男女平等論のことであって、「女は男や家に一方的、権力的に縛られたままでよい」などとつゆだに考えていない。ぼくも、妻を「おまえ！」と罵ってしまうときに、そのことに戦慄をもって気づくし、娘たちのボーイフレンドや男子学生たちの古い女性観に苛立つことも、批判することもある。

そんなわけで、ぼくもまた、男の側から杉山さんと共に、そのことに気づきつづけたいと思うが、杉山さんとちがうところは、出産・中絶の「管理」に批判的であるのみならず、その「自由」に対してもひどく警戒的なことだ。つまり、選別生殖や障害胎児の中絶やは「自由」のなかの選択であったり、医師の親に対するサービスであったりしているもうひとつの現状のほうがぼくには気掛りなのだ。きっと、男であれ女であれ、個人とか主体の「責任」や「判断」に貫流する（日常化し身体化している）能力主義や優生思想は根深く、それは、選別生殖・出産を拒否して「（男女や親子やの）せめぎあう共生」に学びそのように生きようとすることからしか超えられないと確信しているからなのだ。

寺島さんは、「『近代』が嫌いなのですね。女性はまだ『近代』すら獲得していないのに」と言うが、「近代」に男用、女用があるのか。「近代」総体は、生産や効率の追及のなかで、まず「男」を重宝がったのではないか。「そんな近代、嫌い！」と女が言って、男がそのように語りかける女の生き方に反省的にそして堂々とさわやかに縛られていく、そんなイメージや暮らし方があってもいいのにと、ぼくは、お三人の反論に接しながら、いまなお頑なに思ってしまっている。またやり合いましょう。

女と男の家庭科新時代

オホーツクの潮風荒く…

飯付き、風呂付き、パソコン命

編外の番4そ

江口凡太郎

◇二年目の夏

オホーツク海沿岸の暮らしも、二度目の夏を終ろうとしています。九月一日の始業式が常識、という子供時代を過ごした私には、甲子園の高校野球が終らないうちに二学期が始まるのは気が重いものです。

「さあがんばろう！」という気持ちを持てないまま始業式を迎えました。夏休み二十五日間ほとんど全て「出張」で過ごし、いまだに生活のリズムが戻らず、気持ちもうまく切り替えることができないでいます。

◇パソコンに燃えた夏休み

この夏休みは、全道の家政科教員で一人しか当たらない「研修」に行きました。（正確には、行かせていただきました）夏休みのうちの二十三日間、札幌近郊にある道立教育研究所付属情報処理センターに行き、情報処理に関する研修、要するにパソコン操作の勉強をしました。

本校では「家庭情報処理」という「パソコンを教える」新科目が来年度からできます。家庭科を「パソコンで教える」ことには、すべて賛成はできませんが、「パソコンを教える」ことは、避けて通れないように思います。専門の教員が配置されればベストですが、現状では家政科専門科目という位置づけなので、やるしかありません。また、道具としてパソコンを自分がもっと使えるようになりたいと常々感じてもいました。

こんな状況の中で決まった「出張」で夏休み全部「研修」は厳しいなと思いながらも、パソコンの勉強がまとめてできる機会だろうと思い、一応前向きに取り組みました。「研修」は先生方に遅くまで丁寧に指導していただき、自分も集中して取り組むことができて、行ってよかったと思える成果がありました。

しかし、集中したことが思いも寄らぬ方向へ…。

◇飯付き、風呂付きの生活

「研修」の約一ヵ月間は、下宿生活をしました。学生時代から、五年以上自炊生活をしてきた私にとっては、久しぶりの朝晩の食事付きの生活でした。

朝起きてすぐ食事、勤めてから続けていた弁当作りもなく、すぐ出勤、帰ればこれまたビールを飲みながらすぐ食事、お風呂もわいているという、「快適な」生活をおくりました。

仕事になれない最初の数日間は「飯つくってくれるのは助かるなあ」なんて思いながら、過ごしましたが、徐々に、飯付き風呂付きを前提にした働き方になり、生活のリズムも無意識のうちに変わっていきました。

仕事、つまり「研修」のほうは、日に日にパソコンが使えるようになることが自分でも感じられ、連日八時過ぎに帰宅し、夕食後もオリンピック中継をBGMに、夜中までパカパカ、キーボードを打っていました。今までさっぱりわからなかったことが、わかっていくおもしろさ、ハイテク機器を扱う楽しさに、いつのまにか「集中」を通り越して「夢中」になっていました。

◇そして私は「男」になった

そんな中で、はっと気が付いたのです。今の自分はまるで、主婦という後ろだてに支えられた、「仕事命」の猛烈サラリーマンの暮らしではないか！

ショックを受け、下宿で何度か皿洗いをしたものの、あとはすっかり仕事だけの生活になってしまいました。

こんな夏休みから、もとの弁当を毎朝作る生活に戻すのにいまだに苦労しています。大学に入って家庭科を学び、生活のおもしろさと大切さを知り、机上の勉強だけでなく、自分自身も生活者としてけっこう鍛えてきたつもりでした。それが、あまりにもろく崩れたことがショックです。

パソコンという、暮らしを紡ぐこととはまったく違うものの魅力に引き込まれた自分の中に、根強く潜む「男」を痛感しました。生活者としてまだまだ未熟で、脆弱な自分を再発見した夏休みでした。

（紋別南高校家政科）

女と男の家庭科新時代

家庭科――遊ゆう・惑わく

～暮らしと環境問題をつなぐ～

●熊本県上益城郡甲佐中学校●
坂本智子

はじめに

前任校の矢部中学校は、上益城郡の中でも山間部に位置し、広い校区をもつ統合中学校です。昨年度、そこで行ったことを報告します。

矢部中学校は、中小合わせて10の小学校から子どもたちがやってきます。阿蘇外輪山の南の裾野や、九州山地の原生林をかかえた山ひだの奥深いところなど、どこに行ってもすばらしい自然が身近にせまってくる地域ばかりです。

子どもたちは、農業が年々きびしくなり、後継者がいない、地元に仕事が見つからないなど、過疎地の例にもれず、暮らしの中に様々なきびしいものを抱えています。それでも彼らは、狭い田んぼを丁寧に作り、まじめで、人に温かく暮らしているという人々の中で育ってきているのです。私は、この子どもたちが、自分たちを育んでいるこの地域をよく見つめて、誇りに思えるようになってほしいと思っていました。そこで、たまたま、水の授業を思いついたのです。

今はもうずいぶん原生林が伐採されてしまいましたが、まだまだ、緑川の水をはじめ、地下水を涵養する奥深い山と木々があります。その山で生活をしている人々、山を守る仕事をする人々が、この町にはいます。また、その人たちを中心に、九州の脊梁の山を守ろうとする動き

が広がろうとしています。折しも、40キロメートルほど離れた熊本市では、有名な、豊かでおいしい地下水の中に、トリクロロエチレンを始め、数種の有機溶剤やガソリンなどが混入しているという問題が、この数年起きていました。十分な情報を与えられない市民は、その水を飲むより仕方がないのです。

一年生の子どもたちに、自分たちが住んでいるところは、きれいな水を作り、山のない地域に水を送り届けている所なんだということを知らせたいと思いました。計画は、「住居」の領域で、「家庭生活」への移行を考えて作りました。

全体計画（35時間）

1. 私たちの生活と住まい（3）
　・住まいの役割　・住まいの条件　・いろいろな住まい

2. 水と熱源（18）
　・水道水の使用と給水栓、排水器具の仕組み
　・生活排水のゆくえ調べ　・家庭での聞き取り、発表　・石けんと合成洗剤
　・石けん作り　・住まいの整頓と掃除の計画
　・資源やエネルギーの有効な利用
　・箸置き作り

3. 家庭の生活と仕事（9）
　（内容は省略）

授業の様子

「矢部町の川はきれいかて思うね」
「いいや、うちん横の川は水ん濁ってきたにゃあ」
「小学校の時、川ば見につれて行かした時、奇形の魚んおったつよ」
「ヘドロんごたっとの沈んどってから魚もおらん」

と、町部の子どもたちは、川で遊ぶこともないと言い、怒っているようにも、諦めているようにも見えました。

一方、ごく少数の子どもからは、川の水で野菜を洗ったり、泳いだり魚をとったりしたという経験を聞けてほっとさせられました。遠いところからスクールバスで通ってくる子どもは、よく山の中で遊んでいるらしいし、川での水泳もしているようです。

農薬のせいだ、合成洗剤を流すからだという声が聞こ

え出したので、次の提案をしました。

「おじいさんやおばあさんの子どもの頃と今とでは、川はどう変わって来ているのだろう。家の人や近所の人に聞いてきて。何人かの友達と一緒に行ったほうがいいかもしれんね。自分の家から流れて行った水がどうなっているのかというのもみんなで調べてきて合わせてみよう」

子どもたちの問題意識より、先走って調べたいことを私から与えてしまいました。

次の時間は、一緒に調べた子どもたち同士で、広用紙に大きく書いて発表の準備をしました。

子どもたちが聞き取ってきたことから、以前は川が深く、水量も多かったこと、飲み水として町部の水まで使われていたこと、水中の動物たちの数と種類が変わってしまったこと、みんなで川をさらえたり、汚いものを捨てないようにしていたこと等がわかってきました。今より多くの人間が、川と密接につながって暮らしていたようです。たくさんの動植物の名前を聞き出してきた子も少なくありません。

発表の時は、わざとウケるようなことを言ったり、ふざけた質問が出たり、退屈してあまり聞かないということもありました。このへんのまとめ方は、もっと工夫しなければならないところでした。

一人一人の感想には、家庭排水と川の水の汚れの関係を心配しているものが最も多かったと思います。家の排水溝のちかくにアカミミズなどの生き物がいないのは、合成洗剤などの強い毒が入っているのです。そのことでは、家の新築を機に、浄化槽をつけ、澄んだ水を流しているという家があったし、一回小さな池に溜めてから流しているところの話も聞けました。でもここで自分がどう行動するかについては出ないだろうと思っていたところ、合成洗剤で洗わないようにしたいという声も聞かれました。今はさわりたくもない川が、昔は泳げるほど美しかったのです。よく川で遊んでいる子ほど、調べた中身がよくわかったし、理解や作業の遅れがちな子どもも無理なく参加できたことはうれしいことでした。全員の発表を聞くことができました。

矢部町では、公民館活動や老人会などで、地域で石けん作りをしているところも結構あって、合成洗剤が自然にとってよくないという知識はかなりの子がもっているようです。しかし、なかなか矢部町の川は、きれいには

ならないのです。

石けんと合成洗剤の違いを教えた後、家庭科サークルで作成したビデオで、カイワレ大根の発芽の実験を見ました。去年は数種の種で実際に実験をさせたのですが、その時は時間がなかったので、五分でまとめてあるこのビデオを使いました。ここで押さえることは、合成界面活性剤は、ごく薄く薄めても生物の細胞を破壊するということです。

「髪のぬけるとだろう」というのもすぐにわかります。そこで、人体や胎児、川や海への影響を、ビデオやプリントを使って説明しました。

「先生、せっけんば作るとよかよ。家でも作らすよ」といって作り方の紙をもってきてくれた子どもがいたので、それを参考に、固形石けん作りに挑戦しました。みかんの皮や、廃油を各家庭から集めて作った石けんは、いい香りがして、きれいにできたので、各自家に持って帰るようにしました。

冬休みに入るので、石けんを使って、普段手の届かない所を掃除しようという宿題を出しました。これは、案外すんなりと受け入れられ、ほとんどの子が、宿題をし

わが家のクリーン作戦（そうじ）　(1-II X(2)海氏名[伊藤政夫]　冬休みの宿題　1月8日提出

(目的) 家庭科の学習を家庭のくらしに役立てる(石けん作り)　一石三鳥

・「生活技術」を身につける。
・家の人に喜ばれることをする。

(や・方) (計画) → (実行) → (まとめ) の順にする。

(1) 計画
ア. 手作り石けん使用でできるそうじをします。

床ふき、家具ふき、まどふき、冷蔵庫の内外ふき　など 流しまわり、ガス台まわり、洗面所みがき、ふろかまタイル

※たくさんはしないほうがいいでしょう。

イ. どこをするか、そうじ前のようすを、たいてい記録しておこう。
ウ. イラスト、OKが…

[た 掃除] のようす

(2) いざ実行！ 1月 31日 火曜日 (3時 50分から5時 分まで)
計 約2時間

エッ!!! それば何？

注意　固型石けんの使い方
・ぬらしたスポンジにぬりつけてこする → 水流いしたぞうきんでしあげ ぶきする。
・おゆを用意して、その中にけずった石けんの粉を入れよくかしてぞうきんをその中で洗ってふく。 → 水流いしたぞうきんでしあげ ぶきする。

ケガをしないように!!
ガスレンジ、冷蔵庫の下の金具でケガをしやすいので注意。もしケガをしたら水流いして消毒。傷が治ってからまたしよう。

3. まとめ

自分でやったあとの満足感は？
僕にとってもためになり、家族のんにも喜ばれとってもよかった　まさしく 一石三鳥 でした
まぁ～いいことをやったあとは気もちよくはれはれとした気もちでいた
パーやことでいえば、ズバリ 100% PPP

それを見た家の人々のようすや言葉は？
いつもこんなだといいけどなぁ～
あしたは雪がふる、どもたるが、た。
何かコンタンがあるのだろう
でもこれでよいお正月がむかえられるなどといっていた

先生のコメント
これだけせっかたんはしはせん。1人で7時間もすごんって、忍耐力はつくんです。 1/9

てきました。とにかく汚れがよく落ちたと好評でした。みんなも期待以上にがんばったのですが、資料Aの子には、まさかと思い直接確かめてみたりしました。家族から直々の便りで、石けんの効用や、わが子のがんばる姿、こんな宿題は大いに歓迎する等の、めげてしまいがちな私への励ましの言葉も寄せて頂きました。これも予期せぬことでした。

おわりに

私が、「フケが出るときもある」だとか、「髪は一日か二日おきに洗う」などと言ったら、「げっ！　きたにゃあ！」と顔を見合わせる子どもたちです。この自然の仕組みに反する清潔観念に踏み込むことができなかったのは心残りなことです。授業の後、石けんシャンプーに変えた子がいる一方で、相変わらず、合成の歯磨き粉で給食後の歯磨きをしている子もたくさんいました。

矢部町で、実際に、山や水を守る闘いをしてきているのを私は聞いて知っていました。自分も動けるところで少しはやっていたつもりです。でも、そのことを資料としてまとめて与えることができなかったので、生き方を迫ることにたどりつかない実践になったのだと思います。

最後に、私は、小学校から中学校へ移ってから、今年で五年目になりますが、産休や育休で、あまり本腰をいれた取り組みができていません。それでも、前任校でも、今でも、男女共学を続け、子どもを見つめた実践ができるのは、家庭科サークルの仲間が、土台を作っていてくれたからです。月一回の例会では、たくさんの情報や教材をもらうことができ、助けられることばかりです。こんな闘う仲間がいることを支えにして、これまでやってこれたのです。

※8・9月号の記事に誤りがありました。
訂正し、お詫びいたします。
・28ページ、タイトルの「小松友子」さんは、「小松文子」さんの誤りです。
・36ページ中段6行目、「佐藤緋紗子」さんは、「佐々木緋紗子」さんの誤りです。
・68ページ、右段13行目、「三十年振り」→「二十年振り」

私の本棚から

中村泰子
有坂節子

▽『自分さがし』 曽田蕭子著
（太郎次郎社　1780円）

●女たちのおしゃべりから暮らしがかわる

前著『子育ても料理も科学も遊んじゃおう』を読んで、私も何か始めようと思った時のことを思い出し、ワクワクして読み始めました。

いろんな人との間に感じる「壁」を「わからなさ」に置きかえて、「自分さがしの幕開けの合図としてのわからなさ」を大切にして、楽しんで、語り合って、生きる元気にしちゃおう。一緒に「自分さがし」を始めましょう、と穏やかな語り口で誘ってくれます。

いろんな「わからなさ」を大事にすることが、「自分さがし」の第一歩なのでしょう。「もっとわかりたい」と一歩踏み出した時の、「わかっていく」おもしろさが盛り沢山の一冊です。（中村）

▽『常識福祉のウソ』 中澤弘幸著
（日本評論社　1500円）

著者は、養護施設「湘南学園」の園長。91年We夏季フォーラムのインパクトある講演は記憶に新しい。「常識福祉」を疑うことから出発し、管理する側の都合だけで決められていた規則を取り払っていった大胆な学園改革のプロセスを語りつつ、「福祉」の中に潜む欺瞞を鋭く突いていく。

学園に来る子どもたちは大人を信用できず、それぞれに大きな荷物を背負って懸命に生きている。そんな子どもたちに大人のできることは、一人ずつの個としての存在を、あるがままの姿で認め、受けとめること。「それぞれの生命の存在は等価値だ」と語る言葉が、心に響く。（有坂）

▽『らくだ式学習法』 間瀬中子著
（日本評論社　1500円）

〝ちょっと不思議な塾〟、〝すくーるらくだ〟……。

ここでは、学びたい子どもが、らくだ式教材を選ぶことから始まる。どの教材をどれだけやるのかを、子ども自身が決め、指導者も提案し、相互に合意が得られると約束が成立する。自分のために、自分が選んだ約束である。この約束を守ることが、「自分にもできる」という自信へ、多少の困難にぶつかっても、これを乗り越える力へとつながる。

らくだ式は子どもだけでなく大人にとっても楽しく取り組める学習法。塾に来る生徒たちも多種多様で、自己発見のツールになっていることが紹介されている。（有坂）

インタビュー

聞き手
間瀬中子

複眼でみる

—地球の歴史にもリズムがあった—

林　英臣さん

「文明の興亡に周期があり、それを知ることは世界平和につながる」と、鍼灸師をしながら、文明法則史学の話をするために全国を行脚している林英臣さん。林さんの話を聞くことで、今、世界的な傾向にある東洋的なものに関心が寄せられる現象を、別な視点からみることができるかもしれないと興味がわき、お訪ねしました。

プロフィール

はやし　ひでおみ。
文明研究家、鍼灸師。1957年静岡県浜松市に生れる。東京医療専門学校で東洋医学を学ぶ。故沖正弘氏のもとでヨガを一年間修行。1980年、「松下政経塾」に第一期生として入塾。その後、「文明法則史学」の祖、村山節氏から指導を受け、その研究と普及に努める。共著に『二一世紀・日本への提言』（松下政経塾）など。

●東洋への関心

間瀬：林さんが文明法則史学にひかれた原点は？

林：今、思いだしてみると、どうやら九歳の頃のようです。小学校の先生が「いまだに地球上では戦争をやっているところがある」という話をしたんです。「それはいいことではない。何か、私にできることをやらなければ」と思って、子どもですからお祈りするくらいはできると、一番願いを聞いてくれそうな人に頼もうと思いたちました。世界三大宗教はキリスト教、仏教、イスラム教。その教祖がイエスと釈迦とマホメット。では、この三人に頼んだら、誰か、聞いてくれるだろうと、「世界が平和でありますように」っていうお祈りを、寝る前に必ずやるようにしたんです。原点はそのへんですね。

高校時代は柔道とか武道をやっていましてね。武道をやりますと、急所というのが出てきますが、急所というのは東洋医学で重要なツボに当たる。そのことが東洋的なものに興味をもつ一つのきっかけになったのではないかと思うのですが、元々の原点は、小さい頃にやたらに両親が神社仏閣に連れて行ってくれたことかもしれません。父親が車を買ってどこかへ出かけたいというので、日曜日になると、神社仏閣に出かけていましたからね。

高校時代にはボランティア活動もやっていて、福祉施設に行きました。そんなことから老化の問題、健康、医学の問題に興味をもち始め、東洋的なものへの興味と両方合わさって、今、鍼灸、すなわち東洋医学をやるようになったんでしょうね。

その頃宗教書を読みあさったりしましたが、なにかこう「空理空論じゃなくて実になるものを」というインスピレーションがあって、それで、東洋医学を勉強したら、案外、東洋とは何かがつかめるのではないかと思ったこともありましたね。陰陽論とか、人間と宇宙とか、いろいろ基本的な考え方があって、なるほど、と思うことが多く、その選択は正解だったと思っています。

間瀬：松下政経塾へ入られたのは？

林：松下さんの「二十一世紀はアジアの時代になる。そのために受け皿として政経塾をつくる」という趣旨に共鳴したんですが、十九歳のときに、政経塾を受ける前に、文明法則史学を研究している村山節さん（文明法則史学会代表）にお会いし、「文明のリズムからみると、これからはアジアの時代です」と聞いて、自分の今まで

の感じていたことにすごく自信をもったことが、政経塾に入るはずみになったようです。

間瀬：村山さんとはどうして出会われたのですか。

林：鍼灸の学校に入ったときに、同級生から誘われて行った自然食などの研究をする会の講師が村山さんでした。東洋医学を学び、陰陽論などを勉強していましたけど、それが文明にも適用できると聞いてびっくりしました。さらに「これからはアジアの時代になり、日本の役割が大変重要な時代になる」と聞いて、勇気づけられましたね。しかし、文明の事細かなむずかしい研究は、誰かがやるだろうと、私はそのエキスだけいただこうと思って、ときどき村山さんには手紙を出して、論文集などを送っていただいたものの、それから十年間は放っておいたんです。

信じていただけるかどうかわかりませんが、最初の出会いから、十年くらいしてのことです。ある夜半に突然「村山さんに会いに行け」という啓示のようなものを受けまして、ガーンときました。いてもたってもいられなくなって、そわそわと部屋の中をぐるぐる歩き回って、夜十一時を回っていたんですけど、お電話しました。

それから毎月一回必ず、村山さんから文明法則史学のお話を伺うことになって今にいたっています。ここ三、四年前から、村山さんもいよいよご高齢になられたし、文明法則史学を世のなかの人に知ってもらうことを誰かがやらなければいけないから、誰かに引き継ぐまでは私自身がやろうと思いたち、全国を歩いています。

●文明法則史学とは

文明法則史学とは、一言でいうと、地球のバイオリズムです。今まで地球上にいろいろな文明が起こって、やがて消えていった、その興亡に一定のパターンがあることを明らかにしたのが、文明法則史学です。文明や歴史を波としてとらえているんです。

間瀬：村山さんはどうやってそのことに気づかれたのでしょうね。

林：村山さんは歴史上に起こったできごとを、巨大な年表に書き加えていったんです。そのときの大切なポイントがあります。最近のことでも、紀元前のことでも、書くときに、年数の目盛りを一定にしました。十年が一センチメートルであるならば、二十世紀の今日も十年は一センチメートル、紀元前も十年は一センチメートル。

一般の年表は最近になると書くことが増えますので、年数を一定の幅にとらずに、紀元前の幅を千年で一センチメートルにして、十世紀の百年を三センチメートルにとったりしています。全然幅が違います。そういう年表ばかり相手にしていますと、マクロの目でみたとき、流れがどうであるかという統計的な見方が全くできません。だから見えないことがあるんです。

間瀬：起こったいろいろなことを、一本の線上に入れていったんですか。

林：そうですよ。最初は中国、それから中央アジア、ヨーロッパと、三つ分けたようです。それぞれ、起こったできごととか、人物、たとえば、どんな芸術的な天才が出たとか、哲学者とか、いろいろな事細かに、全部その年表に加えていきました。

そういう巨大な年表を作る作業を何回もやり直したそうです。そして、あるときにハッと気がつかれて、大きな文明の終末期を赤で示したらしいんですね。そしたら、その赤い色が等間隔だった。もう一度調べ直してみてもやはりそう。細かく見ていくと、八百プラスマイナス五十年の誤差。ですから、八百年の周期で大きな文明の交替が起きていることがわかった。そういう発見をなさったのが一九三七年。以来五十五年間基礎研究をずっと村山さんが続けてこられました。

●文明の波は二重螺旋

文明の興亡は波に表されます。今は、西の文明が衰亡期に入って、東の文明がこれから活動期に入るところです。西の文明が衰亡期というのは、今、世界で起きている東欧や旧ソ連の問題、ＥＣ統合、アメリカの社会病理などが具体例です。今、アジアに起こっている、中国の華南経済圏が発展したり、アセアンが伸びてきたりする現象はこれから東（アジア）が伸びていくということにおいて起こっている現象です。

波は東の文明波と西の文明波の二本しかありません。この二本線は二重螺旋を描きます。

話は少しそれますが、二重螺旋が一番情報を伝達するのにいいんですね。ＤＮＡの構造と非常によく似ています。ＤＮＡは二本の線が補い合っているでしょう。地球つまり、歴史上のできごと全体をマクロな遺伝子とみると、東西文明も二本の波になっていて、つねにどちらかの文明が文明の創造期にあって、一方は準備期にある。

そして片方が作った文明をもう一方が受け継ぐというバトンタッチをやってきている。そうやって地球文明はあたかも命があるように受けつがれてきているのがわかります。

人類全体が人類体という命であるとみると、その人類体には自然治癒力があるはずです。命のシステムというのはみな自然治癒力がありますから。今の時代は、私たち人類が自然治癒力そのものを意識できるかどうかということが問われているのだと思います。

たとえば、あれだけすごい石の文明を作ったインディオがわずかなスペインの人によって侵略された。不思議ですよね。文明や歴史にもエイジング（歳をとる）があるんです。老化ですね。私たち一個の人間でも、赤ちゃんのとき、青年のとき、老年と、明らかなエイジングがあるでしょ。文明や歴史にも若い時期があれば歳をとっている時期もある。それで波ができるわけです。

だいたいヨーロッパでも、アジアでもそうなんですが、下向きの時期（低調期）は鎖国をとったり、自給自足体制になるんです。ヨーロッパの中世はまさにそう。わが国も戦国の動乱、鎌倉、室町から武家の暗い時代で、鎖国体制をとった。確かに、江戸文化のようになかで醗酵され栄えたものがあって、一見低調期にはみえない時期があるけれども、ヨーロッパとの比較で考えると低調期です。浮世絵がヨーロッパに影響を与えたといいますけど、影響を与えたというよりは、ヨーロッパの芸術の創造力がアジアのものを吸収したと解釈できます。浮世絵師がヨーロッパに出ていって広めたわけではないのですから。

メソポタミアとヨーロッパの関係でみたほうがよくわかるかもしれません。つねに上向きの文明のほうが相手のほうになだれかかるんです。それをメソポタミアとヨーロッパが繰りかえしている。たとえば、ギリシャ・ローマ文明の時代にはメソポタミアが中世的時代ということですが、このギリシャ・ローマの文化がずうっとアジアのほうまで入ってしまっている。アジアにギリシャふうの都市が造られたりしているんです。次の時期は、今度はイラン文明を復興しなければということで出てきたのが、ササン朝のペルシャです。続いてイスラムの時代になりますと、なんとイベリア半島までイスラムの勢力が入っていく。しかし、次の時期に再びヨーロッパが世

界を征服して、アジアが植民地化される。

間瀬：低調期をどう過ごすかですね。侵略されないためには鎖国するというのは一番の方法なんでしょうか。

林：活力がないから自然にそうなると考えたほうがいいと思います。最善の選択ではあるわけですけれど。そういう時期は、中ですごく醗酵して新たな準備ができる時代ですね。本来、これから本当に人類がもっといい意味で進化したならば、下向きが悪くて上向きがよいということはなくなります。下向きは十分に準備をする時期で、これはこれでいい時期、醗酵する時期も必要だと考えています。

どっちかがいい時期だということではなくて、全部いいんです。今までは力のあるほうが力のないほうを侵略したために、下向きのほうは悪いと思われたんですが、バトンタッチしているだけです。

今、この時代は一番大切な時期にきています。ここ十年、二十年を生きるということは、今まで人類が養ってきた業績を無にするか、もっとすばらしいものに転化するかという重大な時期です。

特に、日本の置かれている位置は重要です。ここで自分たちの立場を自覚することは、向こう八百年を決めるんです。非常に重要なところに私たちは生きています。

間瀬：そうすると、日本でみると、西暦四百年のときと今とが似ているということですね。

林：そうなんですよ。この時代は大和朝廷の指導者が活動して、巨大な古墳を造った時期です。それが日本文化の源流になっているんです。神道もこの時代に盛んになりました。日本人の精神性のかなり重要な部分がここで作られていると言えるでしょう。

自分の一生なんて限られた時間ですが、今までの歴史を大呼吸して未来につなげることを考えたら、私自身が生きるということは何千年にわたって生きるということです。私たちは、未来に向けて自分が今何を発信するかという位置に、今、立っていますから、自分の一生というのは、一百年足らずの一生ではなくて、もっと何千年、何万年というなかに、生きているんだということを実感できます。こんな楽しいことはありません。

佐藤　通雅

かりん区便り　4

若い日の第一の愛読書は？と問われたら、ためらうことなく、ロジェ・マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』をあげる。主人公ジャックの生きざまにそのときの私は、ただならず共振した。その後歳月とともにこちらも雑事にとり囲まれるようになり、ゆっくり名作を読む時間が持てなくなった。できたらあの『チボー家』をもう一度読んでみたい、「老眼鏡で読む若き日の愛読書」などというタイトルで感想を綴れたらおもしろいだろうなと思ったりもしてきた。もっとも内心怖れもあった。もしかしたら何の共振も起きず、「第一の愛読書」から失墜するのではないか、若い日に傷がついてしまうのではないか……。あれこれ思い迷いながらも、よし、この夏休みこそ読んでみようと決意し、心の

準備を整えていった。そして実行した。二十七年ぶりの再会。

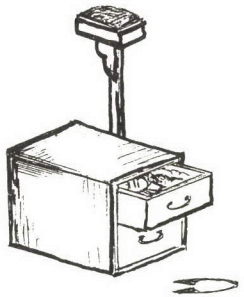
そこに再び共振し、熱中するわが身を発見した――などと語るとちょっと大げさすぎるが、たしかに私は作品の世界に引き込まれ、たちまち第一巻を読了した。ほっと一息ついたところで「かりん区便り」を書いているのである。二十七年間の歳月が一気に縮まる、かつてと同じ自分がここに居る。このことが自分に不可思議さを与える。しかし歳月はまぎれもなくたっている。たとえばジャックの父チボー氏は、現在からしたらすでに旧い型の男性像だ。あるいはジャックが「灰色のノート」に記した「誠実であること！あらゆることに、あらゆる時に、いつも誠実であること！」というようなまっすぐな精神の在り方も、現在にははやらない。このズレにまぎれもない歳月はある。歳月は次々とあるものを風化させていく。しかしジャックの繊細さ、周囲におののき、傷つき、自立へ向かう過程は今なお生きつづける何かだ。かつての自分はそこに共振し、二十七年後の自分も再び共振している。この不可思議さ。若い日の自分にもう一度帰るというのとはちがう。過去の自分が、一瞬に時間を無化して現在にそのまま生きているといえば近い。もっと簡単にいえば昔の自分も今の自分も、ちっとも変わっちゃいないということだ。

しかしそれなら歳月とは何だろうか。さまざまな経験は自分に何ももたらしていないのだろうか。成長の糧になっていないのだろうか。こう問われたら「否」というだろう。疑いもなく何かをもたらしている。現に『チボー家』を再読する自分は、かつて見えなかったさまざまな新しさを発見している。同時に基本的な自分、自分の核は何ら変わっていない。これもたしかなことだ。

五十に手の届くところまで来た自分は、時々歳月の速さにあわてふためく。同時にかつてと同じ自分に出会ってくるめくような不可思議にとらえられる。青年ジャック・チボーと再会したところで、この夏も終わる。（カット／佐藤　通雅）

現代衣生活考

むらき数子



和裁とゆかた

「高校生の孫が、夏休みに自由課題でゆかたを作るんで、手伝ったんですよ」と、一九二三年生まれのBさん、「最近のゆかたは、いろんな色で――昔は、白地は夜着る物、紺地は昼の物、でしたね。塗り下駄を素足で履いて、ちょっと出かけるのはゆかたで行ってましたね。ゆかたは、くたびれてくると、寝巻におろして、最後はオムツにして」。和裁とゆかたの歴史をたどってみよう。

明治生まれ――勉強とは「裁縫」を学ぶこと

Bさんの母Aさんは、一九〇〇（明治三三）年千葉県生まれ。結婚して東京池袋に住んでから、「赤ん坊の私を預けて、和洋女子専門学校の専攻科に通ったんです。母は自分が勉強したかったんですね」。

Aさんにとって、勉強とは「裁縫」を学ぶことだった。

繊維を取る動植物を育てることから始まる衣生活の流れの中で、「裁縫」は布から衣服を形作る技術である。ユカラで讃えられるアイヌ女性の針仕事がしゅうであるのと比べると、「裁縫」が、針仕事の中でも衣服の形を作ることに偏っているのがわかる。

「裁縫」は、忍耐・節約などのしつけでもあった。

また、「裁縫」の教材は、都市のキモノを「通常の衣類」として系統だてたものであって、形・素材とも、人口の圧倒的多数を占める農山漁村の日常着ではなかった。紡織や仕事着の縫い方などの日常に必要な針仕事は、学校外で母姑などから教えられていた。

「裁縫」は家族の衣服を整えるための家事教育であり、職業教育をめざしてはいなかった。

義務教育は、「裁縫」を女らしさの条件に位置づけたが、〝「裁縫」ができる〟ということは、中流のステータス・シンボルだった。

大正末～昭和ひとけた――「空白の世代」

「私は小さい頃から洋服着せられて育ちました。キモノはお正月とか、ゆかたぐらいでしたね」と、Bさん。

大正末から昭和ひとけた（一九二〇－二五年頃）に生まれた人には、古ゆかたのおむつで育ち、小学校入学の時からふだんは洋服、和服は正月や外出の時かゆかた・寝巻だけという衣の和洋二重生活が広まっていた。

和裁ばかりだった尋常小学校の「裁縫」にも、洋裁が取り入れられ始めた。

Bさんは、「母からバッチリ仕込まれました。弟は勉強させておいて、娘の私には、『女は勉強よりは、女の仕事』って、洗い張りから編み物、和裁、洋裁。ねえやさんのキモノは皆木綿でしたね、裏も。で、私はメリンスとかセル・富士絹とかで、木綿はゆかただけでした」。ゆかたは、唯一、差別なく着られる商品だった。

女学校、専門学校を卒業、戦後一九四六年に結婚した時には、「（絹の）キモノが二〇枚位あったでしょうか、ほとんど売ってしまいましたけど」。

Bさんたち、大正末から昭和ひとけたに生まれ、戦後にベビーブームの母となった女性は、「衣服に関しては"空白"の世代」と呼ばれる。理念としては二重生活の和洋裁教育を課されながら、実態は、中流の娘たちは戦時教育や戦後の混乱でキモノどころではなかった。小卒で働く娘たちには、絹のキモノを所持し使いこなすのは戦後の新しい暮らし方だった。洋服の暮らしにもとまどう。Bさんは、同世代の中では和洋二重の裁縫教育とキモノの暮らしを身につけた稀なケースである。

一九四七年から三人を生んだBさん、家業のかたわら、「父のズボンの古をほどいてタイトスカートを作りました、それをまた、男の子の半ズボンに直したり。靴下つぎは毎夜の仕事、パンツから何から縫わなくちゃならなかったから、知的なアンテナトろしてしまって」

おむつは古ゆかたで二〇～三〇組用意し、既製服などないから古着を繰り回して着せる子育てには、和服も洋服も手作りする技術が必要だった。

一九六〇年代、衣生活の充実の中で、「和服ブーム」が続いたが、ふだんにキモノを着る人は減り、晴れ着だけを所持する方向に進んだ。「空白の世代」は、娘の成人式に晴れ着を一着、結婚準備に財産として「ひととお

り」のキモノを揃えてやった。Bさんの娘時代の二重生活が一億総中流の現実となっていた。

和服も布団も既製品で間に合う時代になって、和裁もキモノを着る生活もやめていく。Bさんたちが四〇代の頃には、四割がふだん和服で暮らしていたが、二〇年後の今、「冬季は和服」「仕事などで頻繁に和服」は一割程度。冬はキモノだったBさんも、近年は外出時だけ。

和裁は日常的に必要な技術ではなくなった。

ベビーブーム・団塊の世代——既製服で間に合う

戦後、義務教育の裁縫は技能程度をさげ教材を減らしてきたが、女子に和洋裁を学ばせる、という方針は、一貫していた。ゆかたは和裁を経験するただ一回の機会として、一九六九年の学習指導要領告示まで存続した。

Bさんは「いざ必要になったら私がやってあげるから、若い時には勉強しときなさい」と言って娘たちを男女差なく育てた。一九四七年生まれのCさんは、男女共学・洋服があたりまえ。小学校では男女一緒に「家庭科」をやったが、中学では女子だけの「家庭科」で、ゆかたを「休養着」として製作させられた。ゆかたは当時の小中学生の半分近くの寝巻でもあった。

一九八九年に私が行った調査で、Cさんたち一九四四—五六年生まれ、すなわち義務教育でゆかたを教えられた最後の世代、五四人に尋ねた結果は、ゆかたを学んだと答えたのは四八%。過半数の人は学ばなかったか、記憶になかった。

ゆかたの生産量は一九六四年をピークに減り続け、ゆかたを実習する中学校がしだいに減っていった。ゆかたからパジャマに切り換えた理由は「生活に和服の必要度が少ないから」が四八%であった。

母親の手作りで育てられたCさんたちが中高生になった頃、既製服が出回ってきた。彼女たちは「団塊の世代」と呼ばれ、既製服だけで暮らすようになった。

団塊世代の生んだ第二次ベビーブームのおむつは、古ゆかたの手縫いでなく、新しい白い晒かおむつ用生地がミシンで縫われて五〇〜一〇〇組も積み上げられた。子育て中も既製服で間に合い、繕いに手縫い・ミシン縫いの基本は役立ったが、和裁は役に立たなかった。

Cさんたち五四人が最近一〇年間に和服を着たのは、「ゼロ」が三割、「慶弔に数回着た」過半数、「趣味や

社交の服として一年に数回以上」が少数、ゆかたを着たのはたった一人だった。ゆかたを寝巻に用いる人はゼロ、自家用として和裁をする人はゼロだった。Cさんが社交服として着るキモノは母Bさんが縫ってくれる。

団塊世代にとって、キモノはフォーマルウエアであって、縫わない・着ない・持っているだけの財産。ゆかたで教えられた和裁は応用されることなく忘れられる。

和裁は、「女らしさ」のシンボルではなくなり義務教育から消える。

第二次ベビーブーム世代——ゆかたもファッション

裁縫は、依然として義務教育で女子に課され、女の仕事という意識が続いているが、裁縫＝洋裁の時代である。

ゆかたは義務教育の教材ではなくなり、和裁教育は和裁士養成のための職業教育となった。「女なら和裁ができて当然」という意識に縛られない世代が育ってきたのである。

Cさんの娘は七一年と七四年生まれ、第二次ベビーブーム世代と呼ばれる。Cさんの家に送りつけられた振り袖ダイレクトメールは、一年間で段ボール箱一杯。

それでもきもの離れに苦しむ和装業界は、八〇年代に入ると、キモノを「もう一枚の服」として売り込み始めた。洋服と同じ感覚で「既製品を・自分で選び・自分のカードで買い・自分で着て・遊びに出かける」ようにと。この三年のゆかたブームもその流れにある。

娘たちは、キモノの格やTPO・財産意識にとらわれている母親世代より、自由である。宿題のゆかたに苦しんだ経験もないし、「ゆかた＝ねまき」「古ゆかた＝おむつ」という連想もない。ゆかたを夏のファッションの一つ、夏祭りや花火大会などの晴れ着と考え、「女らしさ」からも自由な娘は、野球場でゆかたの裾をまくって応援する。土曜日の夕方、池袋駅で出会った十九才、「二万五千円です、自分で買いました。三〇分かかって自分で着たんです。これから浅草へ行くんです」。

今後、キモノはふだん着にはならないだろうし、和裁が家事技術として復活することはないだろう。

一九八九年の学習指導要領改訂で、理念としては「裁縫は女だけ」ではなくなる。が、実生活では、繕いは女が続けるのか、女も男もやるようになるのか、あるいは女も男も自分でやらない方向へ進むのか——。

地域の暮らしと家庭科教育

石川尚子

四、米を食べる

（1）ハレの食べものーコメ

「ふだんの日は贅沢しないで、ろくなもの食わなかったから、まったく物日（モノビ）が楽しみだったいなー」

これは昔の食生活について話をお聞きしたおばあちゃんたちの一致した感想である。毎日毎日、朝も昼も夜も、コメの方が少ない麦飯や地粉のうどんばかりを食べていたため、ハレの日の白いごはんやコメ粉の餅・団子は、大変なご馳走であり、無上の喜びであったと言うのだ。

日本人にとってコメは貴重な食品だったが、商品としての価値があったがゆえに、コメをつくりながらコメを食べることができないという歴史が長かった。そこで、村人たちは、仕事の合間合間に行事を組み込み、コメを中心とした神への供えものをつくって、お相伴にあづかった。それもまた、生活を楽しみ、生産への意欲を駆り立てる暮らしの知恵であったと言えよう。

次に、行事と米との関わりについてみてみたい。

（2）年中行事と米

以下、『ふるさと唐子の暮らしと遊び』の引用である。

「正月はもちがなくなるまで一週間くらいは雑煮にして、一月十四日はだんご正月。くず米を石うすでひいてつくったしいなだんごを食べる。一月二十日はえびす講で、白いごはんや赤飯の高盛りにお頭つき。三月三日のお節句には、草もちと白いもちだったが、草もちはくず米をひいてヨモギを入れたもち。四月八日のおしゃか様のは〝花くさもち〟と言うんだけど、誰が言い出したのか、四月八日の〝鼻くそもち〟なんてはやした。五月五日にはじめてお節句をむかえる男の子がいる家では、かしわもちをつくってくばる習慣があって、もらう方も楽しみにしていた。おひまち・おくんちにはもち、トーカンヤにはぼたもち、おかま様にもぼたもちをつくった。」

このほか、お盆のぼたもち、十五夜の月見だんごなどもある。夫の生家で、はじめてお盆のぼたもちをいただ

いた時、その大きさに圧倒された。甘いぼたもちを腹いっぱい食べたいという願いが、このように大きなぼたもちをつくらせたのではないかと感じたものである。

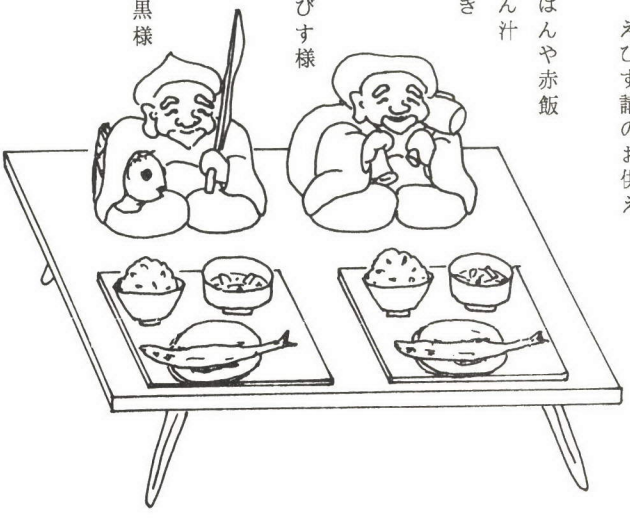
（3）コメに関する言葉いろいろ

コメにはたくさんのことわざや言い伝えがあり、折にふれ言づてされてきた。「米の飯とお天道さまはついてまわる」「米には八十八の手がかかっている」「米の飯をそまつにすると目がつぶれる」「はじめちょろちょろなかパッパ、じわじわどきに火を引いて、赤子泣くともふた取るな」「一合雑炊・二合粥・三合飯に四合すし・五合餅なら誰も食う」「一合雑炊・二合粥・三合飯に四合餅・五合団子に六合粉」というように、いかに食べるか、いかに調理するか等、先人の知恵の数々が短い言葉の中に込められている。特に、炊飯のコツを示す「はじめちょろちょろ」や、コメの節約に言及した「一合雑炊」は傑作で、科学的視点からもうなずけよう。

最近埼玉県比企地方の郷土料理を調べる機会があったが、その内容は「ふだんの食事は、麦と野菜と芋と豆」「ハレの日には、米と魚と甘いもの」と表わせるものであった。庶民の願い・庶民の知恵・庶民の人生観を、地域の暮らしに残るコメの食べ方や対し方から学ぶのも、家庭科教育にとっておもしろい題材になると思う。

えびす講のお供え

白いごはんや赤飯
けんちん汁
お頭つき



松永信子

産む・産めない・産まない

リレーエッセイ（4）

正木美津子

流れてゆく／ながされてゆく／名前もなく／戒名もつけられることのない魂たちが／ひとつの形にならないまま／（中略）流れてゆくながされてゆく／信じこまされてきた役割分担に／疑問を持ちはじめた女たちが／母性の神話に背を向けて／ひたすら自分のなかの女に／忠実でありたいと気づいたときでさえ／葛藤する産む性としての女がのこる／（中略）男を孕み／男に迷い／自分を孕み／自分に迷い揺れる女／男と女の愛は／かならずしも子供という形をとらないし／水子供養寺へ行ってみても／そこで／亡くした魂の片鱗など出会えるわけがない／産むか産まないか／いずれも決定は女の掌中にある

この詩を含む詩集「華やかなひとり」を上梓したのは二十八才でした。確信的にシングルを生きていた私は、経済的自立をしたＯＬであり、長期的なつきあいのパートナーがいました。しかし、経済的自立をしていても、「自分は『これだ』と言えるような仕事をまだやっていない」という焦りが絶えずあり、自己実現が先なのに、と生理が少し遅れるたびに「まだ産めない」。そのことでピリピリしていた二十台後半でした。

三十歳で「自然派レストランびお亭」を京都の中心で開店するに至りました。食べ物屋の仕事は、多少の見習いはしたものの、予想外の仕事量に絶句の連続。でも楽しさ、おもしろさも予想外にあって、手応えのある仕事場を創れたことは誇りでした。お客さんも多く、活気ある店としてスタッフも増え、仕事を通じてのおもしろい出会いが醍醐味ってところ。（この話に興味がある方は、「びお亭」の本がありますので御連絡ください）

忙しく働きながら四年が過ぎたころ、右足に強い痛みが出て、レントゲン写真で骨の形成不全症とわかりました。『手術！』。

産むことを選ばずに仕事に自己実現を賭けてきた私は、

もう目の前がまっ暗に。もはやここまでか、と落胆も大きかった。しかし、スタッフの人たちに励まされて、「足が良くなったらまた働けるじゃないか、自分が作った職場じゃないか」と、考え方に元気が戻ってきました。そして手術後約半年ぐらいして復帰できました。

そうこうして約一年たった時、妊娠したのでした。三十六歳でした。

この時、産むことを選んだ大きな理由は、仕事における自己実現をしてみると、自分の生き方の概要がだいたい把握できたこと。二十代のOL時代とは比較にならないぐらいの自信がついたこと、でしょうか。

ここで、シングルの生き方に執着していた私ならではの「産むことによって喪失すること」について記してみます。（得ることについては多くが語られていますから）

一、仕事三昧、遊び三昧のライフスタイルの急変。可処分所得（自分のために使えるお金）と可処分時間の大幅減。想像していた以上にこの問題はコタえている。

一、健康な人でも子供を抱いていると腰や足が痛むのに、肢体障害者の手帳を持つ身に「ダッコ」の声は、文字通り「骨がけずられる思い」

一、夕方が近づくと仕事に集中できないこと。自分が迎えにいかない時でも、職種柄、片づけに時間がかかるため人にまかせてしまうことが辛い。

一、「産んだ責任」を特に感じてはいないが「気ままに生きて死ぬ人生」を続けられなくなって残念。出産を機に同居した連れ合い以外に、もう一人、人生を向きあうはめになったこと。

最後に、一言。

子供を産んだ年齢までに、たくさんの「自分探しの旅」をしてきたことが、過度な情報にふりまわされず、自分らしい育児としての余裕につながっていると思う。（子供は現在二歳半のやんちゃ娘）

まさき・みつこ　一九五三年生まれ。水瓶座。B型。二十代はOL生活をしながら詩を書いていた。三十歳で自然派レストラン「びお亭」を開業。「家族・血縁の呪縛性」に問題意識を持っている。出産を機に同居。

◆編集部から…この頁は、皆さんからのお便りでつないでいきます。「産む・産めない・産まない」に関する皆さんのご意見を、八五〇字以内にまとめてお送りください。
（送り先　神戸市灘区上野通七―一―四、吉田清彦）

ヤング・インワンダーランド

今号のテーマ

兄弟・家族

酒井和子

ジョウ（19歳）は高校卒業後、働きながら演劇の修行中。弟のタク（15歳）は母親の和子と一緒に暮らしていたが、住まいが事務所を兼ねて人の出入りも激しいので、この6月から兄弟とキヨちゃんの3人で2DKのマンションで共同生活を始めた。和子とキヨちゃんは母子家庭同士、子どもを預けあい助けあってきた仲。17年前に離婚した父は、大阪にいる。

和子―どう？親が居なくても変わらない？

ジョウ―変わらないだって？オマエ、しょっちゅう風呂にはいりに来て洗濯して帰るじゃないか。オレは満足しているよ。一人でアパートに住んでいた時は家賃と光熱費なんかで月5万円かかっていたけど、今は風呂つきで洗濯機もあって4万円の負担だから、生活は向上したよ。

和子―ジョウとタクとキヨちゃんで、月4万円ずつ負担しているんだよね。タクの分は扶養責任者として私が払っている。3人でどんなふうに暮らしているの？

タク―あんましお兄ちゃんとは会うことがない。呼ばれて買い物に行かされる時ぐらい。自分のコップとか食器は自分で洗う。お兄ちゃんに怒られるから。

ジョウ―ごみ出しもオマエの係だろ。オレは仕事してご飯もあまり作らないから関係ないね。だけど共同生活なんだから、自分の知らない人間が、共同に使うものを勝手に使うのは嫌だね。（和子に）夜中に突然知らないオッサンを連れて来て、断りもなしにキヨちゃんのふとんに泊めるなよ。

タク―やっぱし、親が作らないのにキヨちゃんがご飯を作ってくれるのは気を遣う。ボクは、精神的にストレスがたまらないんすよ。でも引っ越してから、ぜんそく

がでるよ。

ジョウ―何、それ。それがストレスなんだよ。

タク―お父さんが漢方薬をくれたよ。薬草が入ったベルトでそれを腹巻きみたいにして寝ると良く利くんですよ。ボクは6パーセントだけ生活レベルが上になったかな。お兄ちゃんには幼少の頃、恐怖を植えつけられたから、少し食器を洗うようになった。

ジョウ―そうだよ、オマエ（タク）は自立してないんだよ。オレがオマエ（和子）の代わりに母親と父親をやってきた部分があって、オレは一人暮らしができるけど一緒に暮らしてる。それって妥協ですか。生活向上のための。

和子―ところで、この前、出張で上京したお父さんに会ったでしょ？

ジョウ―お父さんが、大阪に行ってから初めてだから三年振りかな。オレは父親だと思っているよ。嫌ってた時期もあったけど、それは思春期には誰でもあることだからね。たまに会っても、一、二時間で、ちゃんと対話したことないよ。「何、食べる？ステーキ？」って、小学生の時と言うことが変わんないよ。

タク―キミ、それは違うよ。いいものを食べさせたいというチチの願いだよ。お父さんは、お兄ちゃんに辛い思いをさせたっていうこと、いまでも引きずっているよ。

ジョウ―そうだろうな、とは思うけど、もうオレには父親の力が必要な時ではない。でもまあ、大阪に会いにいったほうがいいとは思っているよ。

タク―そうだよ。ボクは年に二回大阪に行ってる。行く目的は、父親に会うのが6で遊びに行くのが4かな。

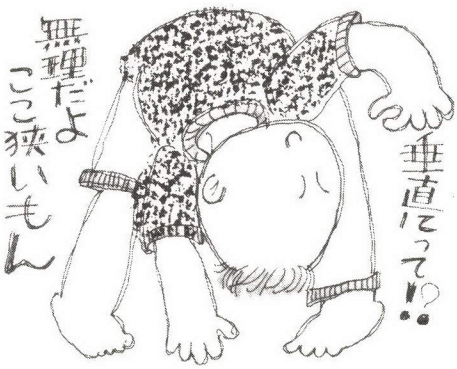
和子―じゃあ、最後に母親に言いたいこと。

タク―他の人に頼まないで、ちゃんとご飯を作ってほしい。冷めててもいいから、ハハの作ったものを食べたい。他には、もうキミに言うことはない。

和子―いいじゃない、誰が作ったって。ちゃんと食べられれば。

タク―それって親の義務だよ。悪いと思っていないのがおかしい。

ジョウ―オレは基本的には、オマエを尊敬しているし、別々の人間として生きてる。まあこれからは、あまりヤクザなことして人様にメイワクをかけたりしないように。オレの母親としてみっともなくないようにってことだね。

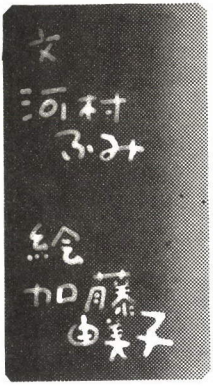


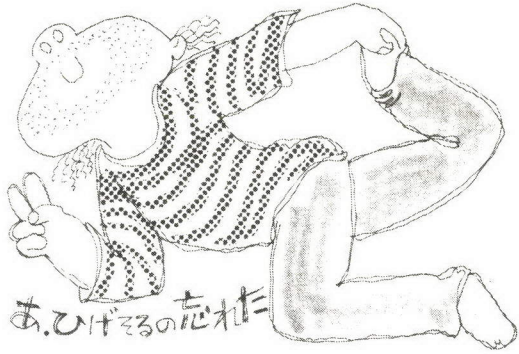
からだにやさしくしなやかに

目の前に食べ物があると、つい手が伸びてしまう。痩せるためのヨーガはないのかというお便りをいただきましたので、今回は、痩せるためのポーズを紹介してみたいと思います。

私は、骨と皮ばかりで太りたいほうなので、つい食べてしまう人が食べたくなくなるというポーズは、すぐには思いつきません。胃腸が丈夫なのでしょうから、おいしく食べられるならそれはいいことだと思うのですが。過食症の人の相談を受けたとき、話を聞いてみると、食べてはいけないと思いながらつい食べてしまう、これを食べたらまた太ってしまうからやめようやめようと思いながらやめられない、というんですね。心理的なことはここでは省きますが、やはりそれなりに食べたくなる理由があるわけです。だから、食べたいときは思いっきり食べたらいいと思います。そのときに、いけないと思いながら食べるのがかえってよくないのではないでしょうか。自分の欲求を素直に認めてあげると、案外少量で満足するかもしれません。私たちはお腹が空かなくても時間がくると食べています。お腹が空いたとき食べ、眠くなったら眠るということが、ほんとはからだにとって自然なのかもしれません。

もうひとつ、栄養学の点からいいますと、体が必要とするすべての栄養素が適量にとれるまで、体は満足しません。一つの食品で全ての栄養素を満たそうとすると、どうしても量を取ることになってしまい、最後の栄養素が満たされるときには、当然他の栄養素はとり過ぎになるわけです。こ





れが太る原因です。牛は、草だけ食べているから太りはしませんが、一日中食べてなければなりません。

というわけで、つい食べてしまう原因が何かはそれぞれ考えていただくとして、まあ食べたいだけ食べたあとで、二時間が過ぎたら次のポーズをやってみてください。からだが整ってくれば、不自然な食べ方は自然となくなるでしょう。

【やさしい三角のポーズ】①足を80センチほど開いて立ち、息を吸いながら両手を左右に伸ばし肩の高さまで上げる。②手足、背筋を伸ばしたまま体をねじって、息を吐きながらゆっくり右手を両足の間、足より少し前方の床につけ、左手は上に伸ばす。両手が縦に一直線になるようにし、顔は上に向けて左手の指先を見る。このまま四呼吸。ゆっくり左右二回行う。かかとを上げないように。上げた手は親指が前にくるようにします。このポーズは腹部をねじるので、ぜい肉がとれます。

【卍（まんじ）のポーズ】①右を下にして横向きに寝る。両ひざを後ろへ曲げて、のびのびと後ろへそらす。②左手を後ろに伸ばして、右足の先を持つ。③左足をおなかの方へ、ひざを直角に曲げておなかと直角になる位置まで引き寄せる。右手は斜め前方に伸ばしてひじをゆるめる。全身が気持ちよく伸びたら四呼吸。逆も同じ動作を行う。頭は後ろにそらしてもいいし、あごを引いて後頭部を伸ばしてもいい。このポーズは全身がすっきりしてとても気持ちのいいポーズです。

読者の広場

東京　向井豊昭

八・九月号で気に入ったのは、蔦森樹さんへのインタビュー。ふと、今、学校ではやっているらしい性教育について、蔦森さんの意見を聞いてみたい気になりました。

こういうインタビューを読むと、ああ、世界は豊かだなァと実感し、感じた心がぐんぐん開いてきます。この世界の豊かさに、性教育は太刀討ちできるでしょうか？

七月号の中では、假野百合子さんの「愛しの先生たち」が一番おもしろかったです。こういうおもしろい先生がいなくなった時代がつまりません。新制中学校ができたときは、日本全国おもしろい先生だらけだったはず。私の中学にも、たとえば、農業高校を出て、助教諭をやった先生がいましたね。よくなぐられました。宿直室で、夜、生徒と酒を飲んだりしましてね。ＰＴＡ会費を使い込みしてクビになりました。後年、私が結核になって、離れた土地に入院したところ、ひょっこり見舞いにきてくれました。今思えば六年にわたるつらい入院生活の中で、私を見舞ってくれた唯一の先生だったことにおどろきます。私は、学校とは、絶望と希望が五分、五分だと思っていました。

七月の初め、そういう私をゆるがす出来事がありました。アルバイトにいったのです。大手の出版問屋の系列会社で、図書館に納本する会社なのです。フロムＡを見て、これこれこういうものだと電話したら、是非来てくれというので出掛けたのです。本の分類番号をつけて、ラベル貼りをしてもらうという約束でした。

行ってみたら、外註に出してしまったので、かわりにこれをやってくださいと、連れていかれたのは、体育館のような広いフロアで、基本カードを入れた箱が、ズラリと棚が並んでいました。十一段の棚です。伝票を手にしながら、番号を見て、基本カードを選ぶのです。そうしながら、九時から五時まで、カードを求めて、あちらの棚からこちらの棚へと歩き続けるのです。北海道から沖縄まで、大学図書館、公共図書館への納本です。バーコードも付け、表紙のビニールによるコーティングまで、それら一切をしてあげて、納本するのです。司書にとって、それらは雑務になってしまったのでしょう。学校の先生が、市販のテストで済ませているように、図書館の司書もまた、手作業を捨てているのでした。

働く人の大部分は、パートの女性でした。四時になると、パートは帰り、ごく小人数

での一時間となります。残っているのは、そのフロアで一番長く勤めているという障害者でした。三十代と思われる彼の身分は準社員。アルバイトの女子学生と、三十代と思われるおばさん、そして私、嘱託と思われるおじさん―以上が五時までのメンバーです。まとめて言えば、老人、女、障害者の差別的な雇用関係を土台にして、言論の自由を支える出版文化は成り立っているのでした。こういうことも知らないで、私はついこの間まで先生をしていたのです。

昔、掃除の時間、私が図書室で、新刊の本を整理していると、子どもたちが寄ってきて、「先生、いつこの本借りれるの？」と、たずねたものです。そういう子どもたちに早く読ませたくて、私は少しの時間も惜しみながら、棚に並べるための努力をしたものです。

アルバイト先で基本カードを選んでみても、私が選んだカードを眺める相手の顔が見えません。カード一枚といえども、それを使う世の中の人の顔が見えるのが理想です。でも、理想から、ズーッと離れた場所にきてしまったんだなアと思ったら、五分五分の希望と絶望は、ガタッと、絶望に傾きました。

一週間働き、結局、私はそこをやめました。歩き詰めの仕事で、腰から肩からそして脚からが痛くなり、一週間が限界でした。こういう時の身のこなし方を、河村ふみさんにならっておけばよかったと思ったものの、後の祭りです。一週間、マッサージに通い、二週間目の今日、まだ体は痛いのです。東京都の労働一一〇番に電話して、労災は適用されないのでしょうか？とたずねたら、やめてしまったので民事になるでしょうとのこと。私には、民事を続けるエネルギーはありません。でも、私は結局、今度の体験を通して、大事な大事な生のエネルギーをもらいました。

働いて四日目のことでした。五時まで一緒に働く一人のおばさんが、心配そうに声をかけてくれました。「からだが痛くないですか？」その声と表情は、心からのものと思えました。私は気を許し、痛さを訴えました。おばさんは、毎晩サロンパスを腰にはって寝るのだそうです。「無理をしないで、ゆっくりやった方がいいですよ」と、おばさんは言ってくれました。初めの日も、「わかりますか？」と、何度も、私のところに寄ってきて、心配してくれたおばさんです。

おばさんと私の場所が移り、すぐに私は一人になりました。窓の下にはスーパーがあります。そのスーパーの商品に隠されたたくさんの顔が、おぼろげに見えてきます。単調な味気無い労働の中で、いたわりを忘れないたくさんのおばさん、あるいはおじさんがいる限り、この世はまだ見捨てられない、この世にも、教育にも、希望はある

と、私は思ってしまったのです。ああ、先生をしたい、と思いました。

先生をしたい時には籍はなし　豊昭

◇　◇

埼玉　**長谷川摂子**

夫と二人で小さな学習塾を営んできた者です。わが子や塾に来る子どもたちを見つめながら、この子たちにとって、学校って何なのだろう、勉強って何なのだろう、と絶えず考えさせられてきました。

小学校低学年の子どもたちを見ていると、生き生きとした好奇心といい、論理的な思考力といい、人間て凄いな、といつも思ったものです。けれど、小学校高学年から中学にかけて、子どもたちのそんな能力も感受性も、目に見えて後退していくような気がします。テストができる子もできない子もほんとうに自分が生き生きできる場所は勉強ではない。勉強は子どもたちにとって、多かれ少なかれ必要悪の色を帯びてくるのです。

学校から「行ける高校はないしと脅迫されて塾に来る、おしゃべり大好きで勉強はいっこう身に入らない中学三年生に、英語のｓｏ～ｔｈａｔ～の構文をｔｏｏ～ｔｏ～の構文に直す方法を教えたりしながら、「一体私は何をやっているのだろう」と時折、虚無的な気分に陥ってしまいます。きっとこの子たちにとっても勉強は虚無的な作業なのだ、こんなことで苦しめないで、生きていく上で高卒の資格が必要なら、みんな入れてやればいいのにと溜め息が出ます。

そんな私は、Ｗｅの熱心な読者ではありませんでした。売買春や環境問題の深刻さはわかっても、こんなにも生き悩んでいる若者たちの心根の不幸に意を達しなければ、教師の空回りになるだけ、という気がしてならなかったのです。

Ｗｅ七月号『学校―絶望？希望？』は衝撃的でした。佐々木賢さんや佐藤通雅さんの現状分析は目がさめるほどリアルに身に迫ってきました。読みすすむうちに、今、教育にとって必要なのは、今までの理想や観念を何とか守り通そうということではなくて、授業中にマニュキアをしたり、編み物をしたりする子どもたちにとって、今、生きているということはどういうことなのか、大人が探りあてることではないかと、はっきり思えてきたのです。

学校を「いこい」の場にする佐々木さんの実践は絶望や教育放棄ではなくて、現場で傷つきながら、ありのままを見つめて考え抜いた人が、学校という場で人（生徒）と人（教師）とが共に生きるという原点に辿りついた結果なのだと思います。そうだ、私もここから出発しなければと足場を見直してしまいました。何もかも教え、伝え、未来を語る教育ではなく、今、目の前の子どもたちと絶望を共有した方がいい。そう

しなければ私たちは、現に生きている人間を見失ってしまう。社会構造に根ざしていて重いけれど、知識や知性のあり方をどう考えていくかなど、ジレンマは深いけれど、とにかく、今、学校をどう考えるか？気が付いたら、白紙の状態だという佐藤さんの正直な言葉は私にはとてもポジティヴに響きます。

今年初めて、小学校低学年の子どもにも勉強ニヒリズムの兆候を見い出しました。さあ、どうするか、私も考え直しです。

◇　◇

東京　**蔵本佳子**

八・九月号の『強姦を考える』の小林さん・浅井さんの実践、とてもよかったです。この授業から二人がどう変わったのか、怒りやら、反省やら、共感やら、大波小波さまざまに引き起こした力作といっていい授業ですね。小林さんが、生徒の遠慮ない言い分に腹を立て、しばらくレポートを見る気もしなかった……とは、私にも覚えがあり、共感しました。さらに「対等な関係」とは何かと問いかけながら、それが自分の内面に向かっていく姿に好感がもてました。

小林さんにしても、浅井さんにしても、教師性（といいますか、教師は模範とならねば……という気持ち）と戦いながら、素手で生徒と向かい合う姿に私はホッとしたものを感じます。自分の意見を主張するほうがいいのかどうかにあまりこだわらず、浅井さんが言うように「答えを一つ示すようにしなくてもよい」、うまくいかないならやめるのではなく、失敗しても、理論にならない言葉にならない無意識のメッセージが残っていくのが、人と人の自然なかかわりではないかと思うのです。

東京で今年六月にたまたま浅井さんとお会いしたときに「あまり力まずやった方がいい。生徒はけっこう先生が失敗する姿も喜ぶものだから、うまくいかなくてもいいのではないか」という意味のことをおっしゃったとき、私はこの方の懐の奥深さを感じました。

それからもう一つ、「男女の共生」ということをテーマに授業をつくっていくとき、「フェミニズム」をあまり柱におきますと、やだら不快を訴える生徒がいますよね。このことを男性中心の世界にどっぷりつかっているからとか、家庭が非民主的であることに慣らされてしまったからとか、一枚岩で私は考えてしまった時期がありましたが、フェミニズムが「近代の産物」であるという視点も入れていかないと、やはり不快と反発で終わってしまうことが多いと思います。女性の恨みを男性が本当に認識するのは、直接接した女性との、真剣で密度の濃いいたわりあう関係からでしょうし、構造的差別一般の学習のみでは簡単に行動に結びつかないでしょう。

こういう私の考えの土台にはフェミニズ

ムとはまったく無縁に生きてきた田舎の祖母の生きざまに、ある種の威厳を感じていることがあるからです。今年八十歳になる祖母のたおやかな顔に、日頃の自分のあがきが吸い込まれていくようです……。

生徒に北欧の男女平等の社会を描いたビデオを見せたあと、ふっと、南米の手織りを伝統とした独自の生活文化をもつ女性の暮らしのビデオを見せてしまったことがありましたけど、「近代」を私自身もっと深く考えたい。何がヒトの幸福なのか、私の幸福なのかを考えたいと思っています。

最後に浅井さんが、従来とは違ったスタイルの授業に意欲を示されていること、また言葉ではない、生徒との心地よい関係のムードを感じながら授業ができたという点……私の関心と一致しました。マニュアル化されない家庭科をどこまでやれるか……厳しいことが多いけど楽しみたいです。

もう一つ、蔦森さんへのインタビューは大胆で、特に重川さんの「セクシーでない」にこだわった質問が楽しめました。時々、意外な面からのこういう切り口のインタビューがあるとおもしろくなると思います。

◇　◇

岐阜　**掛布禮子**

新しい『Ｗｅ』は、比較的字も大きく内容がおもしろいので読みやすく喜んでいます。七月の別冊特集号は、「浮遊する若者たちＰａｒｔⅠ・ＰａｒｔⅡ」などで若者たちの実態や気持ちがよくわかって、大変考えさせられました。佐々木賢さんの学校の生徒の言葉「高校とは、人との交流の場所」という認識がとても印象的でした。学校教育は、もっと早い時期に見直されるべきだと思いました。

八・九月号の特集「汚れとつきあう」というテーマは、とても身近なところにテーマが掘り起こされ深められていて、ウンウン、そうだ！そうだ！同感！などと心で叫びながら読んでいました。小松文子さんの「『清潔志向』を見直す」という提案、大賛成です。お米のとぎ汁がかなりの汚れになると知って以来、私も小松さんのように植物に与えています。

「からだにやさしくしなやかに」は、とても役に立っています。この頁は実践しないと効果は期待できないので、できるだけ万歩計持参で歩くことにしています。二期目の『Ｗｅ』は、この頁だけでも大変イメージが変わったなと感じました。

◇　◇

神奈川　**星名綾**

あと一日で二学期のスタートです。八月からしばらく学校を離れ、妙な解放感を味わってしまい、これって一体どうしてなんだろうかと、我ながら不思議に思っています。八・九月号の「かりん区便り」を読んで、「うーん」とうなってしまい、仕事など少ないほうの私でも、本当にそうだなあ

と思ってしまいました。

十五〜二十年以上いる人の多い職場の中で、「年々、忙しくなるね…」という声をよく耳にします。〝生徒のために、学校を、授業のカリキュラムを○○する〟という理由のもとでの忙しさなのでしょうけれど、会議に出ているだけで、なぜか、ドッと疲れている私には、しんどい環境だなあと、月日が経つほど感じてしまっています。

「学校にとって必要なものは何か―。何ものにもとらわれない時間と空間である…」という部分がとても印象的でした。

「オホーツクの…」番外編、よかったです。昨年の連載から読んでいて、江口さんが苦労したこと、また嬉しかったことなど、ありのままに書かれているところが、いつもステキだなあと思いました。不思議なことに、読んでいて一番元気になれる（というか、同じような悩みをもっている人も、がんばっているんだということが、私にエネルギーを与えてくれる）ものでした。

創刊号で、生徒の感想を紹介していた中で、思わず苦笑してしまうのが、一番最初の「経営の時間はうれしい」というところ。私の授業も昨年一年（今年もですが）、まさにその「うれしい」時間になってしまったようでした。〝うれしく〟なってしまうという裏には、よほど、他の教科で必死な（生徒の言葉では「疲れる」「苦痛」と出てきました）状態があるのだろうか？「授業をボイコットしてやろう」と言われないだけまだいいのだろうか…との複雑な心境で、九月を前にしています。江口さんの今後の活躍を陰ながら応援したいと思いました。

「はつげん」の吉田明弘さんの「歩きながら暮らしの中で考える」、私自身にもあてはまるところがたくさんあってハッとしました。授業でアジアのことに触れても、「自分自身全体をカヤの外に置いた『学び』をしただけのものでした。大学の方針もあったのでしょうが、実習的なものよりも理論をバッチリやって、という学び方が身についていて、現場に立ってみて、実習的なものに、自分がすごく疎くなっていることに気づきます。マニュアルをしっかり作って、という実習ではなくて、自然と体が動くような…そんなふうになれたら―と思っています。体全体を目や耳にして、また、全ての感覚を動員して、陽差しや風の中からいろんなものを吸収していくような学び…。

「歩きながら暮らしの中で考える」は、私にとっても、今後のテーマだなあ、と思ったりしています。

「からだにやさしくしなやかに」…時々頑固な肩凝りに悩まされる私には、実は八・九月号がとっても待ち遠しかった。早速実行しています。

♠いつものように、夏が終わり、秋がやってきた。好きな季節を迎えたのに何か元気が出ない。暑さぼけも、もはや理由にならないし、夏バテといえるほどがんばったわけでもないのに…。

Ｗｅがステキな人との出会いの場になることを願い、その望みはかなえられた。だが、それが同時に別れの場ともなることを予想したことはなかった。

突然、吹き抜けた一陣の風、残された空間をどう埋めればいいのだろう。

（石海）

♥この夏、長野県の松代へ行きました。「松代」は大本営を東京から移すために1944年に作られた地下壕跡のある所です。それも、朝鮮人労働者を使って強制的に掘らせたという。いま、そのことを調べていらっしゃる山根昌子さんの案内で真っ暗な地下壕の中を歩いてきました。人間が生きていくエネルギーの裏にはいろいろな思い（悲しみや苦しみなど）があることを知り、共感なんて簡単にできないけれど、少しでもその思いに近づける感性を持ちたいと思いました。（石橋）

♣フォーラムが終わってから、だらだらと遊び過ぎてしまい、まだ夏休みぼけがとれません。やっと爽やかな季節になって、日曜日になると、子どもたちの野球を見に行ったりしてやっぱり遊んでいます。でも、こんな生活もなかなかいいもんです。いつも何かに追われてきたような、実際に仕事がなくても、気持ちが追われていたような気がします。子どもには「毎日が楽しければ」と思えるけれど、自分にだってそうなんじゃないかと、やっと最近思えるようになりました。（河村）

◆八・九月号で、小松さんの書かれた「清潔志向を見直す」を読み、なるほどと思って実行してみた。私も以前、米の研ぎ汁を植木にかけるなどやっていたが続かなかった。だが今度は私なりに工夫し、楽しみながら、家庭廃水の汚れを減らそうと思う。

米の研ぎ汁のお陰だろうか、夏の間枯れそうだったベランダのベゴニアが、今は可愛い赤やピンクの花をいっぱい咲かせている。

小松さん、どうもありがとう。（有坂）

★９月９日の朝、小松文子さんが亡くなった。バイクで編集室へ向かう途中、車にはねられて……。４か月間、週一回のお付き合いだったとは考えられないほどの抱え切れないものを残して逝ってしまった。

３９歳。あふれるほどの才能と可能性を秘めながら、しっかりと足が地についた発想のできる希有な人だった。純粋で、一本気で、どうしてどうして？と納得できないことはとことん追及していく。ＰＴＡで、地域の市民運動の会で、小松さんの大きな目にみつめられてたじたじとなったひとは数知れないだろう。

３年前から書き始め、「人間の歴史の授業を創る会」の会員に送られていた個人通信「しずく」はファンが多く、雑誌『ひと』にも何度か掲載された。

いまどき珍しい、あったかい血の流れが感じられる、ほんとうに「いいひと」だった。喜怒哀楽を身体一杯に表現して生き、ひたむきに完全燃焼して駆け抜けてしまった。小松さんの遺した、たくさんの「どうして」を、どうやって生かしていったらいいのか、私は途方に暮れる。（稲邑）

くらしと教育をつなぐ－Ｗｅ
Vol.1 No.6　1992年10月15日発行
定価500円（本体485円）
年間購読料／定価7500円（送料共）
〒225 神奈川県横浜市緑区市が尾町1161-8
共学舎内 ☎・FAX 045(974)3101
郵便振替 東京3-754314 ＷＥ編集室
三菱銀行 大久保支店 普0264724
発行／Ｗｅの会　編集／稲邑恭子　河村ふみ　印刷所／(有)イー・エム・ビー　〒102 千代田区飯田橋2 5 2

人と人とのかかわりを紡ぐ

＊「家庭科教育」に関連深い号＊
次から10冊以上お申込みの場合、１冊３００円に
20冊以上お申込みの場合、１冊２００円に
92年12月まで、特別価格でお届けします。

86／7　性一小・中・高校生は何を思う？
86／10　家庭科ーいま新しい地平に立つ
86／11　家庭科ーどう変わる・どう変える
87／6　学校給食で論争しよう
87／7　「制服」着る・着せられる
87／夏　女たちの教育改革提言
88／23　新教育課程をどう考えるか
88／7　なぜ家庭科にコンピュータ
88／10　食と環境といのち
89／1　くらしの論理を創る
89／4　何をねらうか「生活科」
89／6　家庭科ー何を評価するのか
89／夏　家庭科の可能性を探る
89／10　食べものから地球を見る
90／6　「家庭生活」をどう語る
90／7　「環境・資源」を見つめる
90／89　消費者教育は何を目指す？
90／夏　家庭科が変わる一情報化のうねりの中で
90／11　高齢化社会がやってくる
91／1　性役割の固定化は揺らいだか
91／23　新しい家庭科を創る
91／89　ひとと生殖
91／夏　高齢化社会、そのデザイン
91／10　買売春の構図
91／11　アジアの中の私たち
91／12　地球再生へ向けて
92／1　揺らぐ家庭
92／23　男女共生への道を拓く

あなたはもう読みましたか？

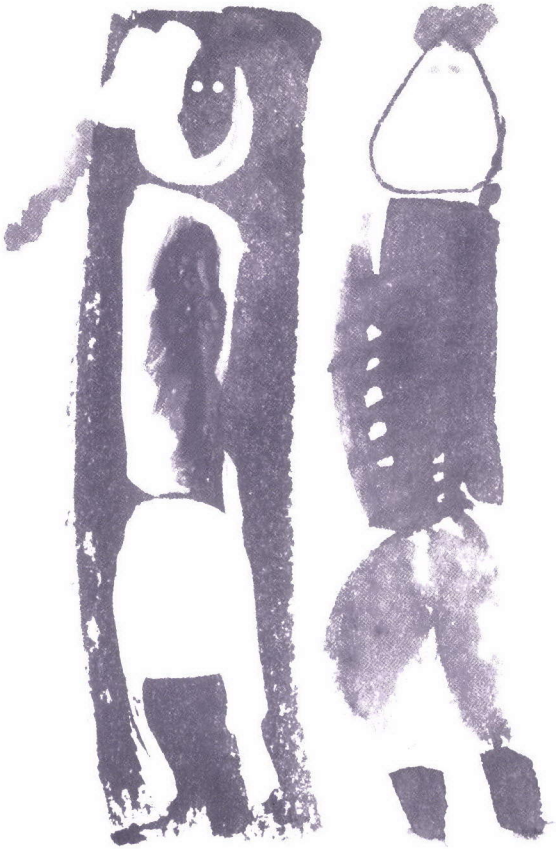
各紙で絶賛！
たとえば、毎日新聞では…

インタビュアー　今週の一冊

長年一緒に暮らしてきた伴りょや肉親を失ったとき、人々はどのようにしてその死に立ち向かい、悲しみを乗り越えていくのか。教育者であり、「新しい家庭科—We」を創刊してその編集長でもあった半田たつ子が夫、半田市男を亡くしてから一年九カ月がたつ。悲嘆をいやすためにも彼女は新しい仕事を自らに課し、精力的にそれをこなしてきた。しかしその一方で、絶えず亡き夫と向き合っている自分を発見する。そして次のような新しいテーマが次々とわいてきた。①人はどのようにして死を迎え、受け入れるのか②治療不可能な病人の傍らで、人は何ができるのか③愛する人を失った悲嘆を、人はどのようにしていやすのか④フェミニズムは、この問題に迫り得るのか⑤教育は、この問題を取り上げなくてよいのか——などである。本書は著者の夫が発病するときから死に至るまでの全過程を克明につづり、それを個人の悲しみから社会の共感を得られるところまで広げて死の意味を求めている。

ウイ書房　〒182　調布市西つつじヶ丘2—25—14
☎03・3326・1380　振替　東京6—59867

ご注文は最寄りの書店に（地方小扱）。直接お申込みの場合は送料をお添えの上、振替で　1200円〒260円



くらしと教育をつなぐＷｅ　1992年10月15日発行　第１巻第６号
定価５００円（本体４８５円　年間購読７５００円送料共）